
芥子の花咲く

水嶋ゆり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

芥子の花咲く

【Nコード】

N8375C

【作者名】

水嶋ゆり

【あらすじ】

19世紀中頃英国の大学生、ケイン・スタンフォードは、天文学者を志していた。ある時、友人のジャックからこの世に2つの月が存在するという桃源郷のような土地があることを知らされ興味を持った。運命の系に導かれるように仲間と共にかの地、インドに降り立った。2つの月を探すうちケインは偶然ある恐ろしい計画を耳にしてしまう。そこで巡り会った皇女、ジャスミンとの運命的な愛。やがて明らかにされる2つのつきの正体とケインの出生の秘密。それは図らずも皇女ジャスミンの秘密をも暴いてしまうことになる。

プロローグ

1 プロローグ

時は1835年、5月。所はロンドンにあるR大学構内。

ケイン・スタンフォードは、毎日午後の授業が終わると決まってその足で構内に設置されている天文台に立ち寄る。天文学を専攻している彼にとって唯一安らげる場所だからだ。しかも夜になるまで誰にも邪魔されず一人になれる。

ところがその日はかりはいつもと違っていた。授業が終わり学内から出ると、友人で考古学者志望の学生、ジャックが声を掛けてきた。

「やあ、ケイン。またいつもの場所に行くのかい？」

ケインと歩幅を合せるように並列して歩く。

「ああ。」

「ちょっと相談があるんだけど・・・一緒に行ってもいいか？」

少々真顔になったジャックを不思議そうに見つめながらケインは言葉無く頷いた。

「相変わらず殺風景な部屋だなあ」

大きな望遠鏡を目の前にしてジャックが呟いた。

「コーヒーでいいかい？」

ジャックの呟きも気にせずケインが問いかけた。

「ああ。」

ジャックもそれに一言だけ答え、空いている椅子に腰を下ろした。

「・・・で？相談て何？」

二人の間にカップを置きながらケインが切り出した。

「ケイン。この世の中に月が2つある。という場所を知ってるか？」

唐突にジャックが言った。ジャックは頭がおかしくなったのか、まじまじとその顔を見た。しかし彼の顔は真剣そのものだ。友人の反応にジャックはフツとため息を漏らした。少し表情が和らぐ。

「ああ悪い。突然こんな事言って。けどこの話は本当の事らしいんだ。まあ聞いてくれ。インドは知ってるだろう？その山奥に小さな集落がある。そこでは月が2つ存在するというんだ。俺もそんな馬鹿げた話信じちゃいなかったんだが、実際そこに行つて来たという人が教授に話したんだ。そこはそこは桃源郷のような所で、一年中花が咲き乱れているらしい。いろいろ話を聞いていくうちに考古学的にも君の専門の天文学的にもとても魅力のある所だ、ということがわかった。そこでだ、我々考古学班がその場所へ行つてその話が本当かどうか確かめることになったんだ。で、月が2つ存在するという話の見極めも兼ねて君を誘いに来た、という訳さ。」

ジャックの言葉に驚きながらもケインの瞳はキラキラ輝き始めた。

「ケイン。今まで何年も友達付き合ひをして来たが、君の瞳って緑色だったんだね？初めて気付いたよ。」

「えっ?!」

まるで悪いものでも見られたかのようにビクツと体を震わせるケイン。しかし当のジャックは特に気にする様子もなくあとを続けた。

「出発は一週間後の今日だ。よく考えてみてくれ。」

そう言つとジャックは席を立ち、入口のドアに手を掛け、再び振り返った。

「ケイン。断るって話なら聞かないよ。」

ウインクをして出て行くジャックをケインはただ黙って見ていた。

つづく

インド上陸

3ヶ月後。ケインを加えた考古学班、教授のサー・アーサー・ドイルを隊長にした、総勢16名は船酔いに苦しみながらも漸くインドのボンベイに降り立った。そこでポーターを雇い、車で行ける所まで移動し、その後はただひたすら磁石を頼りに歩くのだ。

「さすがにこっちは暑いな。」

誰ともなく呟いた。

荷物を手分けして持ち、一行はジャングルを目指す。通訳はアーサー教授の教え子でR大学に留学していたリユー・テリーだ。卒業後は故国で英国人相手に貿易の仕事をしてながら時折通訳の仕事もしている。

「ええ。みなさんそうおっしゃいます。でもジャングルは暑さよりいろいろな生き物があるのでそちらに注意してください。小さな虫でも人の命を奪うものもいるんですよ。それから何といっても一番恐ろしいのはスウォードと呼ばれているトラです。奴は大変獰猛で今まで多数の人間が襲われています。十分気をつけてください。まあ彼に出会うこともないでしょうが。出くわしたなら仕方なく諦めることですね。」

冗談ともつかない言葉でテリーは言った。

「なあケイン。なんかすごい所に来ちゃったなあ。もつと楽にその桃源郷に行けると思っていたのに。」

ケインと肩を並べて歩いていたジャックが話しかけてきた。元よりそうなのだが、何故かケインはある衝撃のためにジャックの言葉に反応することができなかった。"デジャブ"である。この光景は以前何かで見たことがある。そう感じていたのだ。いや、しかし・・・そんな思いを反芻しながらそれでも彼の足はひたすら前に進んでいた。

ボンベイ港到着から数えて1週間目。テリーがしきりにおかしい、と呟き始めた。

「リユー君。一体どうしたんだね？」

アーサー教授が立ち止まった。

「はい。そろそろ目的地に着く頃なんです、目印となる標識が全然見当たらないんです。方角は間違っていないハズなんですけれど。」

二人に合わせるように一行は足を止めた。

「ともかく一時休憩しよう。」

その言葉に荷物を下ろす者、ミズを飲む者、とくつろいだ空気が流れた。と、その一瞬の隙を奴等が襲った。スウォードだ！烏合の衆と化した隊員達の中で誰かが叫んだ。逃げる隊員とポーター達を通常群れでは行動を取らないトラ達が容赦なく追う。2人、3人と倒れていく仲間達。ケインもまたジャックと隊員である2人の女子大生^{ジュディとスー}と共に逃げていたが、木の枝に足を取られて転倒し、そのまま意識を失った。

彼は薄れていく意識の中で、合図のような口笛を聞いたような気がした。

ジャスミンの部屋

「ジャスミン様。あの者達一体どういたしましょう？」

「カシミール。あの人達はわたくし達の聖なる場所に侵入したので。だからと言ってあのままにしておけば全員スウオード達に殺されていたでしょう。スウオードは谷の守り神です。無断で入り込めば容赦なく他のトラ達に襲わせるでしょう。でも余計な血を流させるわけにはいきません。たとえ侵入者であつてもです。」

「ジャスミン様。スウオードと言えば少し不思議な事がありました。」

「不思議な事？」

「はい。私達が止めに入った時、何故かスウオードは一人の男の方をペロペロ舐めていたのです。危ない！と思った私が傍に近寄ると怯えたような目をしたのですが、何とスウオードはその顔に付いていた泥を舐めてふき取っていたのです。」

忠実な従僕のカシミールの言葉は、ジャスミンを驚愕させるのに充分であつた。

「カシミール！それは本当なんですね？！本当にスウオードはその方を襲っていたのではないのですね？」

「は・はい。」

「カシミール。いいですか！その話は絶対秘密にしてください。特に叔父様に知られないよう細心の注意を払つて。いいですね！」

「ジャスミン。一体何をこそそ相談しておる。私に内緒にしておける事などない筈だ。いいや、私の知らない事があつてはならぬのだ！フン！それにしても余計な事をしたものだ。あのままにしておけばこの谷の秘密を知られずに済んだものを。」

ジャスミンの叔父で大臣のヤコブがずるそうな目で二人を見た。

「叔父様。わたくしの部屋に合図もなく入って来られたのは何ゆえ

です？それにたとえ侵入して来た者が悪人であつてもみすみすスワードに殺されていくのを見逃すわけにはいきません。ましてあの中のお一人は。」

「ジャスミン。今の言葉はどういう意味だ？あの中の一人とは一体誰の事だ？」

「ヤコブ様！皇女様に何をなさるんです！！」

突如脇から甲高い声がした。ジャスミン皇女の侍女、プレーナムである。年はジャスミンと左程変わらないのだが、この谷一番のうるさ型なので、さすがのヤコブも彼女が現れると逃げ出してしまふ。

「チツ！嫌な奴が出てきおった。」

憎憎しげにそう呟くとヤコブは退散してしまった。

「カシミール！あんたっていつも皇女様にくっ付いているくせに、どうしていざって時に役に立たないのッ！お可哀相に。皇女様を守つてあげられない召使いなんてどっこを探したっていないわよっ！」

「すみません。プレーナムさん。」

「謝る相手が違つてるわよ！ンともう！」

「いいのよ。プレーナム。わたくしが悪かったのです。もっと周囲に注意を払わなければいけないのに。ごめんなさいねカシミール。」

「申し訳ございません。ジャスミン様……。」

「あんた！この次からちゃんと守つて差し上げてよ！」

「ところでプレーナム。どうかしたの？あの方達についていたのではなかったの？」

思い出したようにジャスミンが話題を変えた。

「アッ！そうでございましたわ！お一人が気付かれたのでお知らせに来たんです。」

「まア、どうしてそれを早く言わないの！」

そう言うなりジャスミンは二人に構わず部屋を出た。その後を影の薄くなったカシミールと一層大きくなったプレーナムが慌てて追いかけた。

客間

（一体ここはどこなんだろう。）生き残った隊員、ケイン、ジヤック。リユー・テリー、アーサー教授、ジュディー、スージーの6名のうち、まずケインが意識を取り戻した。転倒した際どこかに当たったのだろうか、頭がズキズキする。

続いてジャック、テリー、教授の順に目を覚ました。ジュディーとスージーは少し離れた所に寝かされていたためまだ目を覚ましていない。

「う……。イテテテ。」

ジャックは足を怪我したらしく綺麗に包帯が巻かれていた。教授は気付いたものの、腰をひどく打ったようで起き上がることができない。ケインとテリーが手伝ってようやくソファに寝かせた。その物音にジュディーとスージーが目を覚ました。

「ここは？」

お互いが無事なのを知ると二人は一齐に泣き出した。その声を聞きつけたかのようにドアが開き、3名の人間が入ってきた。2人の女性と真面目そうな男。いずれも年が若そうだ。そして女の子達が声高に泣いているのを見て、片方の女性が二人に輪をかけたような甲高い声でたしなめた。

「お静かに！！・・・あなた方は一体どこからいらしたのですか？」

「言葉が通じますよ。教授！」

テリーの第一声。黙って頷く教授。

「私達は通常の会話は困らぬように教育を受けています。あなた方の仰っている事は理解できます。」

代わってその男が答えたが、その表情からは何も読み取ることができない。

「私達はイギリスから来た考古学の研究をしているグループです。私は隊長のアーサー・ドイル。こちらは元教え子で今はこの地で賢

易の仕事をしているリユー・テリー。そして学生であり隊員のジャック、ジューディー、スージー、ケインです。」

一人づつ紹介されると彼らはそれぞれ頭を下げた。

「ケイン？」

中央に立っていた品のいい女性が呟いた。

「助けていただきありがとうございます。それで他の者達は一休・

・・」

不自由な体を起こすように教授が続けた。

「私達が止めに入った時には既に殊　こと　切れておりました。」

無表情の男が淡々と答える。

「そうですか。」

それきり教授は目を閉じて黙ってしまった。涙が両目から溢れ出す。自由になる手を胸の上に置き静かに十字を切ると、それに習うように全員が十字を切った。

「ところでここは一体どこなのです？そしてあなた方は？」

教授が黙ってしまったのでテリーがその後を引き継いだ。

「ここは芥子の谷と呼ばれている所です。この方はこの谷の皇女、ジャスミン様。そして従僕のカシミール。私は侍女のプレーナムです。」

甲高い声の女性、プレーナムが答えた。皇女、と聞くとすぐジャックが反応した。

「やつぱり！！そうじゃないかと思ってたんですよ。実に美しい。

この世の人とは思えない位だ。」

そう言いながらジャスミンに近付く。

「え――――！！」

ついさっきまでワンワンなっていたのが嘘のような声で女の子達が叫び、代わる代わる文句を言い始めた。

しかしジャックの賛辞の言葉も全く気に留める様子も無く、ジャスミンの視線はケインに向けられたままだ。それに気付くとジャック

はケインをからかった。

「お姫様はハンサムなケインに一目ぼれだってサ。」

「何を仰るのです！皇女様に向かって無礼な！」

一段とプレーナムの声が上がる。その高揚とした雰囲気はケインの顔に微妙な変化が現れた。それを見た途端、ジャスミンの体がワナワナと震えだした。

「ジャスミン様？」

心配そうにカシミールが声を掛けた。事実、ケインの変化に気付いたのはジャスミンの他にいなかった。当のケインさえも気付かないしかもその変化はすぐに消えてしまったのだから気付かない者を責められはしなかったのだが。

「い・いいえ。何でもないの。・・・ご挨拶が遅れまして申し訳ございません。この国の皇女、ジャスミンと申します。・・・プレーナム、あとは宜しく頼みます。」

涙をこらえながらもはつきりとした口調で命ずると、足早に客間を出て行った。その後をカシミールがびっくりしたように追って行く。残されたケイン達は突然我に返ったように動き出した。

2つの月（1）

2週間が経った。怪我をして動けないアーサー教授の命めいの下、ジャック達はあたり一帯を調査することになった。果たしてこの地は彼らの目指す所なのであるか？それを当面の課題として行動を起こしたのである。しかしケインの目的はジャックの言った2つの月を探すことである。だがこの2週間、ただの一度も月が2つ昇ったことはない。イギリスと同じ満ち欠けする当たり前の月が1個あるだけだ。ここは自分の求めている場所ではないのではな
いか、そう感じながらも書物でしか知りえなかった星をたくさん見つけた。なにしろ南天の星空である。北に位置するイギリスとは全く異なる星々を実際に見ることができて、それなりに彼は満足していた。だがやはり心の奥では2つの月をこの目で見たい！と願っていた。だから彼の行動は主に夜である。その夜も高台で望遠鏡を片手に夜空を眺めていると突然人の気配がした。ハッとして振り向く
と思いがけずジャスミンが立っていた。

「！！ジャスミン。どうしたんです！こんな時間に。」

この2週間、何故だか解らないがケインはジャスミンを避けていた。
「・・・あなたとどうしてもお話がしたくて勇気を出して来まし
た。」

「僕と？」

「ええ。」

思いつめた様な表情にケインは改めてジャスミンを見た。

「・・・何からお話したら良いのか迷いました。でも1つだけハッキリしている事があります。あなたの額にあるアザの事です。」

（額のアザ？何故その事をこの人は知っているんだ！）

それはケインがここに来た日に顔に現れた微妙な変化の事だった。

「初めてお会いした時、偶然見てしまったのです。三日月型のアザを。あれは何かの理由で気持ちに乱れが生じた時だけ現れるの

ではありませんか？・・・実はわたくし、同じアザを持っている方。いいえ、持っていた方と言った方がいいでしょう。存じ上げているのです。やはりあなたと同じ形でした。」

ケインが答えないのでジャスミンは言葉を続けた。しかし言葉は発しなくとも動揺しているのがわかる。三日月型のアザがくつきりと額に現れたからである。その事はケイン自身痛いほど感じていた。

「ほら、今も出ているわ。これでようやく2つの月が揃いました。この谷が救われる時が訪れたのです。」

ジャスミンの目には懐かしさの余り涙が溢れている。

（2つの月？どういう事だ！）

「ごめんなさい。また驚かせてしまったようですね。話せば長くなりますが、この事を話さなければあなたは調査が終わればいずれ帰国してしまうでしょう・・・実は、あなたとわたくしは現王でありわたくしの父、ムフアドが決めたいいなずけ同士なのです。」

「え？今なんて言いました？」

「あなたとわたくしはいいなずけ同士なのです、と申しました。」

「は・はは。何かと思えばバカバカしい話を。あなたは自分の言っている事が解っているんですか？僕達はたった2週間前に出会ったばかりなんですよ。騙すにしてももつと上手い嘘があるだろうに。」

これ以上ジャスミンの馬鹿げた話に付き合っていられないとばかりケインは立ち去ろうとした。

「あなたのお母様の名前はオピウム。お父様の名前はジェイムズ。と仰るではありませんか？」

「え？何故それを。・・・ああ、ジャックに聞いたんですね。」

「いいえ。あの方とはお話していません。ですからその事も含めてお話ししなければならないのです。」

一旦立ち去ろうとしたものの、彼女の曰くありがたな表情にケインはジャスミンに促されるままその場に腰を下ろした。

2つの月（2）

「わたくしの話を聞いて下さるのですね。ありがとうございます。」

言葉を選ぶかのようにジャズミンは深く息を吸い込んだ。その横顔は月明かりに照らされてこの世のものとは思えない程美しい。この谷一杯に咲いている花のようだ、と彼は思った。そこで意を決したように彼女は彼の方に向きを変えた。

「・・・この谷に咲いている花。お分かりですか？これは一面けしの花なのです。その事を心の隅に留めて置いてください。・・・今から23年前のことです。2人のイギリス人がこの谷に迷い込みました。彼等は探検家でした。徒歩でインド横断をしていた時に道に迷い、何日もジャングルの中を彷徨った挙句のことだったのです。2人共怪我をしていたため、わたくしの叔母が看病しました。その甲斐あって徐々に快方に向かい、歩けるようになった彼等は生来の探検心が沸いたのでしよう、谷の事を調べ始めました。当時王だったのはわたくしの祖父でしたから、それに対して初めは目をつぶっていました。でもある事を境に彼等への態度が変わったのです。それは2人のうちの1人と叔母との間に恋愛感情が生まれたからです。部外者と谷の、それも王家の者との恋愛など祖父にとってはもっての外でした。即刻出て行くように彼等は命令されたのですが、頑として2人は聞き入れません。そこで祖父は谷にある財宝を差し出し再度勧告しました。すると1人はすぐ出て行くと約束し荷物をまとめました。叔母と恋人になった方は一生ここにいますからと懇願し、当時皇子だった父も彼の博識ぶりに感銘を受け、心酔していたこともあって彼の見方をしました。その甲斐あってようやくその願いは聞き入れられ、その後1人は財宝を携え、カシミールの父に道案内をしてもらい出て行きました。あとに残った1人は叔母と正式に結

婚し、父と共に祖父の手助けをすることになったのです。

1年後には2人の間に男の子も生まれ、幸せに暮らしていました。
・
・ですがそれから5年後、この谷始まって以来の原因不明の疫病が発生したのです。誰もそれが何なのかわかりません。するとどこからともなくよそ者が入ってきたからだ、という噂が流れたのです。勿論根も葉もない話なのですが、その頃は誰かを犯人にしなければ事態は収まりませんでした。いち早く身の危険を感じたその方は息子である男の子を連れてこの谷から逃れました。」

ジャスミンはそこでふっとため息をついた。今までの話と自分がジャスミンのいいなずけだ。という事のどこに関連性があるのだろう・

・

その時サーツと一陣の風が吹き、

「そして・・・」

話を続けようとした彼女の口を突如ケインが塞いだ。

陰謀（１）

「この・・・しない手はないですよ。」

1人が言うつと、

「そして我々は・・・ジャスミン・・・」

1人が答える。風と共に二人の前に現れたのは複数の男だった。しかしその声も折からの風と人の気配に素早く身を隠したせいで、ところどころしか聞こえない。加えて何人の人間がいるのかも、声の調子を落として話しているので解らない。だが1人はジャスミンの名を口にしていた。彼女の様子が気になり横を見ると、恐ろしいのかギョツと目をつぶり、両手でしっかり自分の腕にしがみついている。その姿はケインの心の奥に暖かいものを湧き上がらせた。

なおも声の主は話し続ける。

「交換条件ということで・・・」

どちらかがそう言うつと同時にカサカサという音がして彼等はその場か遠ざかった。

足音が完全に聞こえなくなるのを待つてケインはジャスミンを促した。

「今のは誰だったんだろう。わかる？」

しかし余程怖かったとみえてジャスミンにはケインの言葉も聞こえていない様子だ。しかも小刻みに震えている。彼はその身体を思わずギョツと抱き締めた。

「アッ！！」

「大丈夫。僕が付いている。大丈夫・・・」

ジャスミンの背中を軽く叩きながら慰めていると、先程心の奥で湧き上がったものが何だったのかはつきりした形で蘇った。もしかしたら自分達はジャスミンの言う通り、ずっと前から愛し合っていたのかもしれない。そんな感情に囚われ、不安そうにじっと自分を見

上げているジャスミンの可愛らしい唇にそっと自分の唇を近づけた。

ジュディーとスージー

ケインとジャスミンとの間にかすかな繋がり、の芽生えた翌日のことである。ジュディーとスージーがアーサー教授の部屋にいきり立つて入って行った。何しろ調査といっても何も無い。荷物は襲われた場所にあることに間違いはないのだが、あの恐ろしい光景を思い出すから取りにはいけない。しかもこの谷がインドのどこに位置しているのかも明らかではないので、道具不足、資料不足のまま作業しなければならず、その行為は非常に困難を極めた。

「先生！私達の調査は役に立ってるんですか？！」
年若いスージーが業　ごう　を煮やし、アーサー教授に食って掛かった。

「スージー！」

「先輩だってそう思ってるんでしょう？」

「申し訳ありません。先生。スージーにはちゃんと聞いて聞かせますから。」

「いいのだよ、ジュディー。・・・ああ、ありがとう。」

自分で身体を起こそうとしたアーサーをジュディーが助け起こした。「スージー。君がそう思うのも無理はない。もっと前に説明しておくべきだったのだからね。・・・まずここがどこなのか、ということだが。・・・ここに着いてから2日後。ケインが星を見て測量した結果、デカン高原のどこかに位置しているということだ。日数、歩行距離からみてもほぼ間違いはないだろうと思う。・・・そこで君達に質問なのだが。デカン高原といって思い出すものはないかね？」

アーサーの優しい眼差しが2人に問いかけるように注がれた。

「デカン高原？・・・アッ！もしかすると先生はアジャンターの事を仰っているのではありませんか？」

先輩のジュディーが答えた。

「おお！さすがはわが考古学教室トップの成績を誇る生徒だね、君は。その通りだよ。今から１８年前に私達の先輩によって発見された石窟寺院だね。復習の意味も兼ねて言ってみなさい。」

アーサーは目を閉じてジュディーの答えを待った。

「先生！私にも答えさせて下さい！」

ところがスージーも負けてはいない。

「おおスージー。それでは君が答えなさい。いいかね？ジュディー。」

「

「はい、もちろんです。」

「じゃスージー。アジャンターのことで君が知っている事を答えなさい。」

「はい！・・・アジャンターとは元々マハーラシュトラ地方にある村のことで、BC2世紀からAD8世紀頃に作られ、29の石で出来た寺院です。壁画はグプタ美術の粋を表しています。1817年、先程先生が仰ったようにイギリス人の手によって発見されました。・・・どうですか？先生。」

「良く出来たね。スージー嬉しいよ。ではジュディー。何か付け加えることはないかね？」

「はい。アジャンターはサムドラグプタ時代に掘り始められました。仏教遺跡ですがインドには仏教徒はあまりおらず、ヒンズー教徒が多かったと云われています。カースト制度がその代表ともいえるものです。また、シヴァ、ヴィシュヌ、ブラフマーという3人の神を崇めているのも特徴的です。」

「ウーーム。良く勉強しているね君は。」

アーサーの言葉にジュディーの顔が赤らんだ。

ジュディーはどちらかといえば秀才肌の生徒であり外見にこだわらない女の子だった。化粧も殆どしないし、遺跡発掘のためなら何日もシャワーを使わなくても平気である。

一方、スージーはなるべくなら遊びたいタイプで、考古学を選んだ

のも穴掘りさえしていれば単位がもらえる？という安易な考えで専攻した所謂 いわゆる 流行 はやり の学生だった。そんな2人だったが、なぜかウマが合うというか、話が合ったらしく、ジュデイーのほうが1年先輩にも関わらず仲良くなり、今回の調査隊の一員に加わった。

しかし元々負けず嫌いのスージーの心の中に面と向かって教授に誉められているジュデイーに対抗意識が芽生え、

「先生！そのくらいなら私だって！」

といきり立った。だがその言葉を遮るようにアーサーが言った。

「そのアジャントアの近くに先ごろ全く別の遺跡があるらしい、という記事が出たのだよ。私は今回の発掘でそれを証明しようと思っていたのだ。ただそれがどこなのか、皆目見当がつかないのだよ。」

「えっ！それは本当ですか？！」

思わず2人は驚きの声を上げた。

ジャックの計画

ジューディー達がアーサーの部屋で思いもよらぬ話を聞いていた頃、ケインは昨夜のジャスミンとの会話をもう一度考えてみようとその高台（ジャスミンによればエローラの丘と云うそうだ）に行った。何者かの侵入によって中断されたジャスミンの話。その何者かが言っていたジャスミン、交換条件、途切れ途切れの会話・・・そういった事が頭から離れずあのままジャスミンと別れてしまったことが悔やまれ、ベッドに横になったものの昨夜は殆ど眠れなかった。もしかするとジャスミンも同じ気持ちであり、この丘に来るのではないか？そして昨夜の話をしてくれるのではないか？という期待もあった。思わずキスをしてしまったのは運命なのか、それとも月明かりのせい・・・つまりムーンライトマジックなのか、確かめたい気持ちもあった。

しかしひょっこり現れたのはジャスミンではなくジャックであった。突然の彼の出現に驚いたケインだったが、彼以上にジャックはギョツとしたように立ち止まった。

「ケ・ケイン？何故ここに？」

「何故って夜はいつもここに来てたんだけど、日中はどんな所なのかと思って来てみたんだ。」

咄嗟に嘘をついた。

「そ・そうか。」

「君こそこんなに朝早く何をしているんだ？」

「俺？・・・君に見つかったのも何かの縁だな。仕方ない・・・いいか、ケイン。これから話す事は教授達に内緒にしていれくれ。絶対に！！」

そう言ったジャックの両目が急にギラギラしてきた。それに圧倒されケインは思わず頷いた。

「……俺達はイギリスを立つ前、ある計画を立てていた。俺達というより教授が、と言った方がいいかもしれない。実は今から18年前、イギリス人がアジャンターという所で石窟寺院を発見したんだ。」

と、アーサーがジュディー達に話した内容をジャックは説明した。

「……それを探す為のインド行きでもあったんだ。ただ君の参加を何故教授が言ってきたのかは全くの謎なんだが。たとえ天文学的見地から2つの月の存在を証明する。といっても他の生徒でも良かったはず。なのに何故か教授は君を、つまりケイン・スタンフオードを！と指名してきた。ところがいざインドに来てみるとあんな悲惨な事が起きてしまった。教授もショックを受けてこのまま帰国しようか、という気持ちになったようだった。けれど君の話で俄然やる気が戻ってきたんだ。」

「僕の話？」

「ああ。君の説明からするとこの辺りはデカン高原の一部だそうじゃないか。教授はそこに目を付けたのさ。デカン地方の中なら可能性はある、とね。そこでこの谷の住人に手伝ってもらって、まあ殆ど道案内と言った方がいいかな。彼等とあちこち探したんだ。リューさんも初めのうちは昔の経験を生かして調査に加わっていたんだけれど、仕事に関する何かがあったということで途中から離脱してしまった。だから実質俺とジュディーとスージーの3人でやっているというわけさ。もともと彼女達には詳しい話をしていないから一体何を探しているのか五里霧中の状態だと思う。それにあの2人はまだ実践的な作業が豊富じゃない。つまり机上の空論の域を出ていない。そこで教授や彼女達に内緒で俺は1人調査しようと考えた。だから一昨日からこうして昼夜問わず動き回っているんだ。」

「昼夜問わず？じゃあ昨夜も歩き回っていたという事かい？」

もしかすると昨夜の人物のうち、1人はジャックだったのかもしれない。そんな疑念が頭の隅をよぎった。

「昨夜？ああ勿論さ。ここから5キロ程離れた所で天気も良かった

から野宿してたんだ。遠くの方で獣の鳴き声がしたが、まさかあのトラ達じゃないだろうな、なんて考えてたら知らずに朝になってた。
- - - - - いいかケイン。発掘には単独行動は禁じられているんだ。
だから俺がこうして動いていることは絶対黙っていてくれ。頼むよ！
」

ジャックの答えにホツとしながらも、じゃああれは一体誰だったんだろう？その疑惑が再びケインの心に頭をもたげてきた。心ここに
あらずといった状態でケインは「分かった。」とだけ答えた。

ムファド王

その頃ジャスミンも昨夜の事を思い出しながら、元王であり父のムファドの寝室にいた。ケインの事を報告するためである。

ムファド王は2年程前に病気で倒れて以来、寝たきりの状態になってしまったが、脳には影響がなかったらしく言葉もハッキリしている。だが身体が思うように動かない為以前のように政務を全うすることができない。大臣で義弟のヤコブが代行しているのだが、最近王の椅子を密かに狙っている、との噂を耳にしたらはムファド王はジャスミンに良い婿を、と考えていた。そんな矢先、もしかするとオピウムの息子かもしれない、という男が現れた。その男、ケインの一挙一動を逐一報告するように、とカシミールに命じた。しかしその事はジャスミンには知らされてはいなかった。

ジャスミンはベッド脇の椅子に腰掛けた。

「お父様。ご機嫌いかが？」

彼女の声はカナリヤのように美しく、聞く者全てに安らぎを与える。「おお。ジャスミン。今日のお前は一段と美しいの。何かあったのかね？」

「い・いいえ。あの・お父様にご報告申し上げたいことがありました。てこのような時間も顧みず来てしまいました。」

その頬がほんのりと赤らんだ。

「何だね？」

父、ムファドの問いに昨夜のケインとの会話を掻い摘んで話した。但し、正体の分からぬ人物とその後のケインとのキスは除いて。しかしジャスミンの報告は既にカシミールから全て聞いていた王は、愛娘の話をニコニコと聞いていただけだった。

「それでお前はそのケインという男に何時^{いつ}全てを話すのだね？私は早ければ良いと思うのだがね。そうすればお前の身は守っても

らえるだろうし、オピウムもきつと天国でそれを望んでいるだろう。

「昔を思い出すかのように王は遠くを見つめた。」

「でもお父様。あの方が叔母様の実子だとハッキリしたわけではないのですよ。」

不安そうに自分を見つめるジャスミンに王は言った。

「大丈夫。お前の話を聞いてケインとやらがオピウムの忘れ形見であることがはつきりしたよ。お前は先程ケインの瞳が綺麗は緑色だったと言ったね。『私があの子を最後に見た時も深い緑の色を放っておった。知らない国へ行くという不安さえも感じない位にの。決定的なものが額のアザじゃ。お前も知っての通り、オピウムは左の腕に三日月のアザを持っておった。ケインは父親より母親の血をより強く受け継いでいるようだ。……そうか……ケインという名前であの子は大きくなったのじゃな。私の知っていた名前は、ブーマグプタであった。星座に興味を持つように、とインドの学者になぞらえて私がつけてやった名だ。その名の通り星に興味を持ったのじゃな。……よしよし。ジャスミン。私の口からケインに話そう。お前の事も頼んでおきたいからの。ケインを呼んでおくれ。なるべく早くじゃぞ。……それからお前は席をはずしていなさい。」

「はい。」

父の命令でジャスミンが出て行くのを確認したのかカシミールが音もなく王の寝室に入った。しばらくしてジャスミンに呼ばれたケインが同じように入って行った。

それから3時間後。王の容態が急変し、突如意識不明に陥った。知らせを受けたジャスミンは、すぐ王の容態について絶対極秘にするよう臣下に申し渡した。お陰でその件はごく一部の人間のみが知ることとなった。

ふれあう心

王の容態が進展せぬままいたずらに時は過ぎ、4ヶ月が経った。大臣でありジャスミンの叔父、ヤコブはムファド王の容態が良くないらしいということを薄々感じたらしく、自分が次期王であるということを表立って口にするようになった。ジャスミン1人の力ではどうにもなくなる程に。そんな彼女の唯一の支えはやはりケインの存在だった。いつでもさりげなく傍にいてくれる、それだけで救われた。ケインもジャスミンから聞いた話を全面的に信じたわけではなかったが、誰かが彼女を狙っているということは紛れもない事実なので、できるだけ彼女の傍から離れないように努めていた。それまでジャスミンに仕えていたカシミールとプレーナムもケインが信用のおける人物だとみなすと、ケインの荷物を勝手にジャスミンの部屋に持って来て寝食を共にし、彼女を危険から守って欲しいと懇願した。さすがに同じ部屋は困ると辞退したケインだったが、「皇女様のお命には代えられません!」と、じつに実のある説得に根負けし、その夜からジャスミンの部屋で生活を共にすることになった。それで一層お互いのことがわかった。ケインは自分の出生、両親、額のアザの事等をジャスミンの口から聞くに及ぶと益々彼女との深い繋がりを痛感した。

一方ジャスミンは小さい頃より父王から詳しい話を聞かされていたので、既にまだ見ぬ男性に恋をしていた。実際ケインがその人らしいと解った途端、自分の一生を捧げる人だと感じた。寄り添って歩く2人の姿は微笑ましく、彼等を見た者達に安堵の気持ちを起こさせた。それに対してもヤコブは苦々しく思い口を挟んできた。よそ者のケインに対する待遇が気に食わないらしい。しかしヤコブのあからさまな態度も今のジャスミンにとっては全く気にならないようだ。政務が終わると必ずケインに寄り添い、王の部屋で意識の

ない父に話しかけながら時を過ごすようになっていた。

またケインにとってはヤコブのジャスミンに対する態度が不安材料ではあったが、取り立てて何をされたという訳ではないため、周囲に注意を払いながら不穏な日々を送っていた。

そんなある日。1人の不可解な行動がカシミールによってケインにもたらされた。

陰謀（２）

「テリーさんが？」

「はい。あの方は貿易商だと伺いましたが。」

「ああ。僕はここに来てから知ったんだが、教授の教え子でジャックも信頼のおける人だといっていた。そんな人がどうして。」

ケインの顔には信じられない、という色が現れている。

「私は当初より皆様方の行動を逐一王に報告しておりました。するとテリー様の動きがおかしいことに気付いたのです。そして配下の者に命じずつと尾行させておりました。」

「報告？ということは僕を含め他のメンバーの事も報告していたのか？」

不快そうに顔を歪めるケイン。額のアザが薄く浮き上がる。

「申し訳ありません。ですがこの件に関しましては皇女は全く関与しておりません。ご安心下さい。」

ジャスミンは関与していないということがわかってホッとしたものの、別の疑惑が湧きあがった。

「ということはあの夜も僕達を見ていたということか？」

「あの夜？・・・僕達と申しますと・・・アア、あの夜の事でございますか。はい。ですがお二人が何を話し、何をしていたかは全く覚えておりません。はい。神に誓つて。」

「覚えていないということは既に王に報告済みということか・・・仕方ない。そのお陰で僕はこの谷の人たちから良くしてもらってるんだから。・・・！！ということはあの男達も見たのか？！」

「はい。私は風上に潜んでおりましたので奴らの顔ははっきりと見ました。けれど話の内容は残念ながら聞き取ることができませんでした。」

「誰だったんだ、そいつらは！」

「二人でした。お一人はヤコブ様。そしてもうお一人はテリー様で

した。」

思いもよらぬ名前が出てケインはショックを受けた。

「大臣とテリーさんが！・・奴らはジャスミンと言った。しない手はない、とか交換条件という言葉も聞いた。だが僕が聞いたのはそれだけだった。一体奴らは何を企んでいるんだ？」

「そこなのです。ヤコブ様は以前より現王の後目あとめを虎視眈々と狙っておりまして。叔父と姪という間柄でありながら皇女と結婚して王になろうとしていたのです。ところが王は許しません。勿論皇女も叔父であるヤコブ様を嫌っておりましてので今まで手を出せませんでした。ところが何故かあなた様方がいらっしゃってからのというものヤコブ様の力が増大してきたのです。力・・と申しましても財力にという意味です。私達が調べましたところテリー様の力をもつてすれば可能であることがわかりました。」

ケイン様。この谷の花が何であるか皇女にお聞きになられたでしょう。ここは芥子けしの谷と呼ばれている程見渡す限り芥子けしの花が一年中咲いております。その花が最近異常に減っているのです。それがどうもテリー様が花を大量にイギリスへ流しているためらしいのです。この花は薬にもなるのですが、一方では毒にもなり、悪用しますと人間を生きる屍しかばねにしてしまうそうです。またとても高い値がついていると伺いました。ジェームズ様が私の父に教えて下さったのです。清の国へ旅をなさった折、そういった人たちを数多く見たのでその悲惨さもよく知っていると悲しげに話しておられたそうです。その花をどうやらテリー様が金儲けのために本国へ売買しているらしいのです。」

「父からその話は聞いたことがある。しかしテリーさんは花をイギリスに運んで一体どうするつもりなんだろう？・・・！！まさかイギリスに広めるつもりじゃ！ カシミール！のんびりしている場合じゃない！急いでテリーさんのやっていることを突き止めて止めさせなければ！」

急いでその場を立ち去ろうとするケインをカシミールが引き止めた。

「お待ち下さい。テリー様については配下の者が引き続き調査しておりますので結果を待ちましょう。それよりも一つ。あなた様にお知らせしなければならぬことがあるのです。」

「僕に？」

「はい。とても重要な事。ジャスミン様のことでございます。」

カシミールの意味ありげな言葉にケインの額に三日月のアザがはつきりと現れた。

ジャスミンの秘密

「これから話す事はあなた様の将来にも関わる事ですので注意してお聞き下さい。ただ皇女にはどんな事があっても知られる事のない様おねがいましたします。」

カシミールの声の調子が変わった。

「秘密の話を僕が聞いてもいいのか？」

「あなた様だからこそ打ち明けるのです。――私の家は代々王家に仕えてきました。前王から私の父はお側に上がっております。ケイン様。皇女はムファド王の実のご息女ではございません。王には子種がなかったのでございます。少年の頃の病が元で子供を作る機能が失われ、王妃は王公認の下、隣国のさるお方と数回寢所を共になさいました。それで皇女が誕生したのです。今から18年前のことです。既にその時ケイン様とジェイムズ様は本国に帰られた後でしたので、ジェイムズ様もその事はご存知なかったはずでした。しかしそれは絶対漏れてはならぬ事でした。知っていたのは王と私の父と王妃出産の折お側に仕えておりましたプレーナムの母のみでございました。その後ジャスミン様は何も知らず王の愛娘として幸せにお育ちになられました。王妃は出産後公認といえど王以外の殿方の寢所を共にした、という罪の意識に苛まれ間もなく崩御なさいました。ですから現在事実を知っているのは王、私、プレーナムの3人だけなのです。」

カシミールの一言一言はケインにショックを与え続けた。

「……こんな極秘事項を何故僕に話した？」

驚きの余り、声が掠れているのが分かる。

「父の遺言でございます。」

「遺言？」

「はい。王がどんなに皇女を可愛がろうと王家の血筋を引いた方は

オピウム様のお子様ただお1人、つまりあなた様なのでございます。その事はずっと王も認めておられました。無論私の父にしか打ち明けなかったそうですが。そこで王と計らい、将来ケイン様、当時はブーマグプタ様でした。をジャスミン様と娶めあわせて王家の血筋を存続させるという計画を立てたのです。問題はブーマ様、つまりあなた様がこの地を訪れることがあるかどうか、ということでございます。そこで父がジェイムズ様と一緒にこの地を訪れ、一足先にイギリスに戻られた方、バーナード様を数年かけて探し出し、何とかブーマ様をここへ来ていただくように仕向けて欲しいと懇願いたしました。詳しい話は私も聞いておりませんのでどのようにしてバーナード様が話されたのか分かりませんが、とにかく上手くいった旨の手紙を受け取り嬉々としていた父が突然倒れ、三日後に亡くなってしまう。その死の直前、私は枕元に呼ばれこの話を聞いたのです。今度この地に足を踏み入れる方がブーマ様ご本人と確認したら、この秘密を話すよう申し渡されました。あの時のトラ。スウォード達は私の命令で皆様方を襲ったのです。」

「何だと！！それじゃお前は僕をここに連れてくるためだけにあの人達を殺したというのか？！」

「罪は私1人にあります。皇女は今でもあなた方が不法にこの谷に侵入して来た為スウォードに襲われたと信じております。全て私1人が計画したことです。」

若いが決して意思を曲げない強さがそこにあった。いつもプレーナムに怒鳴られてシユンとなっていた、あの気弱なカシミールはどこにも見受けられなかった。

しかし怒りが全身を覆っているケインには終始冷静なカシミールが、いやそれ以上にそんな計画にむざむざ引つかかってしまった自分が許せなかった。

「ウオォー！！！」

腹の底から搾り出すような叫び声を上げると、ケインは忠実な従僕

の顔に鋭い一発を浴びせ走り去った。残されたカシミールの顔が見る見るうちに紫色にはれ上がった。

ジャスミンの危機

ジャスミンの部屋では気の早いプレーナムがケインとジャスミンの婚礼の準備に大わらわで、衣装はあれがいいとか部屋も変えたほうがいいのか、1人で何やら忙しそうにしている。

「姫さま！そんなにのんびりやさんじゃケイン様に嫌われますよ！」

「プレーナムが早すぎるのよ。そうなると思ったわけじゃないのに。」

「あ~~~~ら、宜しいんですかあ？そんなこと仰つて。ケイン様がいらしてからというものの言葉に出さなくったつてみ~~~~んな知ってますのよ。姫さまがケイン様のことをどう思つてらっしゃるのか。それにケイン様だつて満更でもないご様子ですしい。」

「だつてまだはつきり仰つていただいてないし・・・」

ジャスミンの顔が真っ赤になり言葉もしどろもどろになっている。

「はつきり？はつきりつて何の事です？」

プレーナムはジャスミンが何を言いたいのか解つていたが、ちょっとしたいたずら心が顔をもたげてきた。

「あ・あ・・・結婚して・・・欲しいつて・・・」

ジャスミンの声にならない声にプレーナムはニコツと笑った。

「あ~~~~ら、な~~~~るほどお。じゃあ今からケイン様のところへ行つてその言葉を言つて頂きましょう！姫さまはケイン様の態度がはつきりしないのでうじうじしている！と私が申し上げますわ！ササッ！行きましょう！」

プレーナムはジャスミンの返事も聞かずその手を取つて部屋を出ようとした。

その時、何者かが2人の背後から襲いかかり布切れで口を覆った。アッという間もなく彼女達は悪者の手に落ちてしまった。

ケインの心

意外なカシミールの告白に怒り心頭に達したケインは、宮殿を飛び出しがむしやりに走った。今までの事は全て仕組まれた事だったのか！カシミールはジャスミンは知らぬ事と言ったけれど今の彼にはその言葉を素直に信じる事ができなかった。自分のジャスミンに対する想いさえも。

どの位走ったのだろうか。ふと気がつくといつも場所、エロラの丘に来ていた。どこをどう走ったのかさえ記憶になかった。とうとう力尽きてケインは倒れこんでしまった。
(一体自分は何だったのだろうか？)その一言が頭の中を回転木馬のように駆け巡っていた。

やがてうつすら目を開けるとあたり一面芥子けしの花・・・こんなことがずっと昔もあったような気がする。・・・自分がまだブマーと呼ばれていた頃・・・綺麗な女の人に叱られて一人泣きながら家を出た事があった。あの時は同じ位の男の子たちにいじめられ、その女の人に泣きながら話した後のことがあった。何と言ったんだろう？・・・よそ者？そうだ！僕はよそ者と言われあの女の人に興奮して喋ったんだ！その側には・・・父さん？するとその女の人は・・・母さん・・・じゃ、あの女の人が僕の母？・・・ブマー？ 何故今僕はブマーと呼ばれていた頃と思っただろう？・・・ブマーという人は星のことを勉強していた学者でその人の名前をつけた・・・僕に？・・・すると僕は・・・ケインの瞼まぶたの裏に今はつきりと両親の姿が映し出された。自分は、自分の母親はカシミールの言う通り、ムファド王の妹、オピウムだったのか？・・・小さい頃母親について父ジェイムズに問い質したことがあった。どうして僕にはママがないのか？一体僕のママはどんな人だったのか？etc. だが父の答えは『お前の母は美しく、優しく、それでいて凜とした性格

の人だった』とだけ。しかし一度だけケインが片親だという理由でハイスクールの先生から厭味を言われた時、

『この子是由緒正しい家柄の子供です。』

と言い切ったのである。その時は父独特のはったりだろうと気にも留めなかったのだが、今となってみればそれは真実だったのだ。ともかくその当時は父の言葉でケインは救われたのだった。

自分は芥子の谷の王族の一員だった。しかも唯一現王ムファドの血の繋がりのある……。現実を直視しなければなるまい。しかしその為に何人も人間が犠牲になった。その罪を一生背負っていることが自分に出来るのだろうか……。過去から現在までの記憶が走馬灯のように駆け巡っていた。

フツと気が付くと辺りは薄暗くなっていた。知らないうちに眠ってしまったようだ。しかしそのお陰で大分気持ちも落ち着き、いつまでもこんな風にしても何も始まらないと思い直した。だがこれからどうすればいいのか全くわからない。カシミールの顔を見ると思うと腹が立つが、ひとまず宮殿に戻って今後のことを考えようと重い気持ちを奮い立たせるように帰途についた。

異変

宮殿に戻ってみると何やら様子がおかしい。侍女たちがソワソワしている。

何かあったのか？と尋ねると、プレーナムの姿が見えないという。いつからだ？と重ねて聞くと、午後、皇女の部屋で婚礼の準備があるからと急がしそうにしているのは見たが、その後ブツリと姿が見えなくなってしまったとの答え。辺りを見渡すと、家臣達の様子も変だ。再びケインは彼等に尋ねた。どうしたのか？と・・・異様な胸騒ぎがする。問われたのがケインだとわかると、ホッとしたように逆に聞かれた。

「皇女はどちらにいらっしゃるのです？ずっとお捜し申しているのですが、どこにもいらっしゃらないのです。政務が滞って仕方ありません。」と。

「僕は一緒じゃない。」

その一言が家臣達に大きな衝撃を与えた。皇女とプレーナムに何かがあった！途端に宮殿中色めき立った。

外は既に闇の世界。外出すれば彼等の身に危険が迫る。ケインも改めて宮殿中隈なく捜した。だがいない。

闇の世界が終わりを告げる頃になってもまだ見つからない。

（どこに行ったんだ。ジャスミン！）

意気消沈してソファに座り込むと、一挙に疲労感がケインの身体を襲った。

（だがこうしてはいられない！ジャスミンの身に何かあったら全て僕のせいだ！）

再び立ち上がるが気持ちばかり焦って考えがまとまらない。

「ケイン。どうしたのじゃ？」

そんなケインの気持ちを知ってか知らずかヤコブが眠そうな目をこ

すりながら近寄ってきた。

「ジャス・・・いいえ。何でもありません。」

ケインはそのまま立ち去ろうとした。

「ジャスミンがどうかしたのか？」

まるで昨夜からの騒ぎは全て知っているぞ、といわんばかりの目つきだ。

「ご存知なのですね？知っているのに何故お尋ねになるのです？」

「私は当て推量で申したまでの事。それではやはりジャスミンの事で何か？」

「昨日の午後から姿が見えないのです。プレーナム共々。」

「何だと！何故それを早く言わんのだ！ジョジョ！すぐに皇女とプレーナムの行方を捜すのだ！」

召使いのジョジョに一喝すると、自分も捜すからとケインの前から足早に立ち去った。

誘拐

「ン？・・・ここは・・・アッ！！姫様！ジャスミン様！！」
素早く辺りを見回すと、すぐ側に青ざめた顔のジャスミンが横たわっていた。

「ジャスミン様！しつかり！」

慌ててその身体を揺すってみると、ゆっくりとジャスミンの瞼が開いた。
まぶた

「ああ！お氣が付かれましたか？良かった！」

感激の余りプレーナムの目には涙が溢れている。

「プレーナム？・・・ここは・・・」

「わかりません。でも私達は何者かに連れ去られたのだと思います。」

「連れ去られた？」

途端にジャスミンの身体が震え始めた。エローラの丘でのあの男達の会話が頭の中で蘇る。
よみがえ

『ジャスミン・・・』『交換条件・・・』『自分達は何者かの餌食になったのだろうか？その姿を見て、自分がしつかりしなくては！』
思ったのか、プレーナムがいつもの彼女に戻った。

「大丈夫ですわ！このプレーナムが付いております！皇女様に指一本触れさせるのですか！」

「おお、相変わらず威勢がいいのお。」

突然背後から男の声がした。

「キャー！」

二人は思いつきり叫び声を上げ、お互いをギュッと抱き締めあった。

「そんなに驚かずとも良い。」

「ヤコブ様！」

「叔父様！」

同時にその名を呼ぶ二人。

「ヤコブ様！これは一体何の真似です？！私達を早く帰してください！」

「プレーナム。ここでそちの威勢のいい声を聞いても誰もびくともせぬぞ。それにお前達は生きてここから宮殿に帰ることはないからの。フフフフ。」

ヤコブの笑い声は二人のいる洞穴一杯に不気味に響き渡った。

危うし！ジャスミン

生きて帰ることは出来ない？ ヤコブの言葉に再び2人は恐怖に慄いた。おのそれでもプレーナムは気丈に立ち向かう。

「ヤ・ヤコブ様！このお方はあなた様の姪でもあるのですよ！そして現王のたった一人のお子様です！その方に向かってこの扱いは無礼以上の何ものでもありませんよ！」

「ホウ！この後に及んでもそのようなセリフが言えるとは。さすがプレーナム・誉めてやろう。だがそのような戯言もこれまでだ。なぜならそなた達の消息が絶たれてから既に3日経つておる。みな必死になって捜しておるが、何の手掛りも掴めないのだからのお。ソレツ！」

その言葉を合図に現れたのはヤコブを主とする反ムファド派の数名の男達。谷にはムファド王支持者が大半を占めている中、ヤコブを支持する者もいた。特に近頃になってヤコブの財力が増大するにつれ、少しずつではあったがその数に変化が現れていた。その連中はジャスミンとプレーナムにどつと襲い掛かり、あつという間に縄で2人を縛り、石柱に括くつてしまった。

「何をする！無礼な！」

プレーナムの声が興奮の余り一段と高くなる。

「おい！何をしておる。早く猿轡さるくわを噛ませろ！！」

ヤコブの叱責が飛ぶ。

「大臣。女性に手荒な真似はいけませんよ。」

その時、また別の声が響いた。

「テリー様！……ジユディーさ……ま？ 何ゆえあなた方が

？！」

「大臣。そんな風に女性を拘束しほつては失礼ですよ。どうです？あの方法を試されては？一度見たいと仰っていたではありませんか。」

声の主はリユー・テリーだった。ジャックたちと一緒に発掘をしていたはずの彼が何故ここに？しかしその顔は宮殿で見た時とは打って変わった冷酷なものだった。しかもジュディーまでもが一緒とは一体何故……？

テリーはジャスミン達を全く気にせずヤコブに話しかけた。ジュディーは気が咎めるのかその陰に隠れ顔を背けている。

「テリー。おお！そうじゃ。そちの言う通り、あれを見てみたい！！じゃがここで出来るかの？」

「大丈夫でしょう。この2人だけにして出入口を封鎖すれば、あとは時間が経つのをじつと外で待っていればいいのですから。」

「おお！……それではそなたに任せよう。じゃが生きてこの2人を帰すわけにはゆかぬぞ。企てを知っておる。」

「えっ？！テリー！話が違うわ！」

それまで黙っていたジュディーが叫んだ。

「ジュディー。僕に強力すると言った時から君も同じ穴のムジナなんだ。さあ！急ごう！ぐずぐずしていると人が来る！」

そう言うテリーはすぐ指示を出し、2人の回りに数個の香炉を置いた。何やら煙が立ち昇っている。

「急いでここを出るんだ！」

その声と共にどつと入口に向かうヤコブ達。

「さあ！君もだ！こんな所でアヘンの毒にやられたくないだろう！」

「アヘン？！この煙はアヘンのですか！」

「プレーナム。君は噂通りの優秀な侍女だね。たっぷり煙を吸ってそのまま死んでいただこう。」

嫌がるジュディーの腕を無理やり引っ張ると、テリーは入口に走った。

ゴホゴホ！

他に人がいなくなると、急激に煙が2人を覆い始めた。

「プレーナム？」

不安に慄くジャスミン。おの

「姫様！大丈夫です！きつとケイン様が助けに来て下さいますよ！お気を確かに！それにしても3日間も気を失っていたなんて不覚でした。

いいですか。煙は上に昇ります。なるべく・・・こうして下の方に身体をずらして・・・そうそう、じっとして動かずに動けば風が起こって煙の回りも早くなります。じっと・・・そう。そのままで・・・姫様。お城に戻ったらおいしいものをたくさん頂きましょうね・・・」

そう言ったプレーナムの目に涙が光った。

刻一刻と洞穴を覆っていくアヘンの煙・・・

危うし！ジャスミン！どうなる？プレーナム！！

搜索

ジャスミンとブレーナムが消えてから3日経ってもその消息は杳^{よう}として掴めなかった。ケインの心に苛^わ立ちと藁^{わら}にもする思いが錯綜^{さくそう}していた。ジャスミン達がいなくなつてからというもの、何度となくエローラの丘に登った。初めてジャスミンと心の琴線が触れたこの場所に来れば、何かしら手掛りが掴めそうな気がするからだった。しかしその都度絶望感に襲われた。

ところが今回ばかりは違っていた。信じられない事だが、まだ午前中だというのに、天空に一際^{ひととき}明るい星が現れたのだ。日差しも眩しいくらいだというのに……。南の空でこんなに明るい星といつたらカノープスしかない。それにしても日中、星が見えるなんて！ ひょつとしたらジャスミンの消息が判るかもしれない！ そんな奇跡が起こっても不思議はない！ そんな気がしてケインは逸^はる心を抑えながら走り出した。

丘を下ったところで彼の足が止まった。トラだ！ 1頭……。いや、数頭のトラがじつと彼を見つめていた。真ん中にいるトラがグルグルと喉を鳴らし、じりじりと近付いてくる。万事休す！ ！ ジャスミンを捜し出す前に自分が殺されてしまふ！ 思わず目を瞑^{つむ}った。・。しかし、何も起こらない。それどころかそのトラが彼の手をペロペロと舐め始めたのだ。ハツとして目を開けると、それに気付いたのかトラはゴロンと横になり、腹を上に向けた。撫でてくれ、とでも言っているように。それは獣にとって絶対服従を意味するのではないか。

「スウオード？」

スウオードは名前を呼ばれると猫のような鳴き声を出して甘えてきた。体は大きいが、ケインの前では子猫のようだ。

「スウオード。僕がわかるのか？ そうか。撫でてやりたいが今は

それどころじゃないんだ。ジャスミンがない。お前に言ったところでどうしようもないけれど、一緒に捜してくれないか？」

理解するはずもないと知りつつ、すぎる思いでスウォードに語りかけた。するとケインの必死の思いが届いたのか、スウォードはブルツと体を震わせ立ち上がった。その目は甘えていた時とは異なり、既に猛獣のものになっていた。

ウォン！と一声上げると、まるでケインについて来い！と言わんばかりに服を引っ張った。

「危ない！！」

突然後ろから声がした。ジャックだった。彼はジャスミン達を捜すうち偶然この丘にやって来た。その時ケインがトラに囲まれているのを見て思わず叫んだのだった。ジャックの声に1頭のトラが身構えた。

「大丈夫だ。・・・スウォード達は仲間だ。」

さあ行こう

！

ケインの言葉にスウォードが走り出した。それに続くケインとジャック。時折スウォードは距離を測るように立ち止まる。2人の速度に合わせるかのように。

走り出して間もなく道は険しくなりジャングルに入った。普段なら絶対足を踏み入れてはならない所だ。そう兵士に教えてもらった。しかし今はジャングルの王、スウォードがいる。何も恐れる事はないのだ。

時間になると7、8分も経ったろうか、一段と木々が鬱蒼うつそうとした場所で不意にスウォードが立ち止まった。

「ど・どうしたんだ？」

ハアハアした息使いでケインが聞くと、スウォードはケインの袖を銜くわえ前に押し出した。そこには明らかに人の手によって隠されたと思われる石の扉があった。

「ここを開けるといふのか？」

再び甘えるようにケインの手を舐めるスウオード。了解の意味で頷くとケインはその扉を押してみた。しかしびくともしない。ジャックの手を借りてようやく開けることができた。

むつとするような臭気。恐る恐る彼等の中に入って行った。中は薄暗く、奥に進む程、臭い^{にお}がきつくなる。2人はいやな予感に襲われ先を急いだ。すると1本の石柱に身体を縛られ気を失っているジャスミンとプレーナムの姿が目に入った。

「ジャスミン！」「プレーナム！」

ケインはジャスミンの、ジャックはプレーナムの縄を急いで解き、そのまま抱き上げて外に出た。

救出

「ジャスミン！しっかりするんだ！僕だ！ケインだ！」

気が狂ったようにケインはジャスミンの身体を揺すった。（神よ！）
ジャックも同じようにプレーナムの身体を揺すっている。

「プレーナム！しっかりしろ！」

するとプレーナムはジャックの呼びかけに意識を取り戻した。

「ウ・・・ア・・・ゴホゴホ・・・ハアハア

ハー・・・ア、

ジャック様？ あ！姫様！姫は？！」

「大丈夫だ。ケインが助けた。」

「ハア・・・良かった・・・」

ジャックはプレーナムの背中をさすってやった。しかしジャスミンは必死のケインの呼びかけにもかかわらず意識が戻らない。反応さえしないのだ。（どうすればいい？）ケインはジャックとプレーナムの存在も忘れ、想いの全てを込めてその細身の身体をギュッと抱き締めた。（どうか助かってくれ！）

ピクツとジャスミンの唇が震えた。気付いたのか？抱き締めた腕に更に力がこもる。

「・・・ア・・・」

可愛らしい唇から息の漏れるような声が出た。

「ジャスミン！！」

素早くジャスミンの額にキスをする。（ありがとうございます・・・

）誰にともなく言葉が出た。

「ケ・イ・ン？」

力を入らない腕でジャスミンもケインにすがりついた。だがその腕もすぐだらりと下に垂れてしまう。

「僕が悪かった・・・君から目を離してしまった僕が・・・」

ケインの腕の中でジャスミンは違う、というように微かに首を振っ

た。

「いいえ。私が油断したのがいけなかったのです。」

弱々しいがプレーナムも調子を取り戻しつつあった。

「とにかくここから出よう。ケイン！お姫様を頼む。俺はプレーナムを連れて行く。さあ！」

ジャックはプレーナムに背中を見せ、背負っていくという仕草をした。しかしプレーナムは1人でいける、と立ち上がった。だが歩く事が出来ず、結局ジャックの背中に身を任せた。

ケインは最初から決めていたようにジャスミンの腕を自分の首に回し、そのまま抱き上げた。

道案内はずっと表に潜んでいたスウォードである。他のトラ達はいつの間にか姿を消していた。

九天の中の最上の天

アヘンの香炉を設置したヤコブ、テリー一派は素早く洞穴を離れ、それぞれの場所に戻った。

（あとは時間が全てを解決してくれる。）全員がそう思っていた。

更に3日が経った。ジャスミン達が姿を消してから6日後のことだ。ヤコブは政務に戻っても自然に顔が綻ほころんでくるのを禁じえなかった。（もうじきこの谷は私のものになる。王は具合が悪いようだし。もし仮に平癒したとしても以前のようにには戻れないだろう。でなければジャスミンと同じ方法で始末してしまえばいい。フッフ）家臣もいっになくヤコブが上機嫌なので、おかしい。と感じつつ、各々（おのおの）の仕事に従事していた。

テリーは自分の仕事に寸分の狂いはないはず。と確信していたので未来は前途洋々、次期王であるやこぶと手を組んだ今、恐れるものは何もないと有頂天になっていた。邪魔者は消した。ジュディーにはたっぷり甘い汁を吸わせてあるからまず裏切る心配はない。仮に裏切ったとしても俺には最後の手段がある。案ずる事はない。あるのは輝かしい未来だけだ。

「テリー。何故皇女達をあそこに閉じ込めたの?!」

テリーの自信を打ち砕くようにジュディーが問い詰めた。

「ジュディー。俺は皇女達に対して何の感情も持つてはいない。あくまでもビジネスとしてヤコブに従ったまでだ。この一面に咲く芥子の花を全て売りつくしてやる!」

「売りつくすですって?! 一体どこに売っているの!」

「知りたいか? なら教えてやろう。君はもう仲間だからな。君も俺なしでは生きてはいけないだろう。え? そうじゃないのか?」

テリーの指がジュディーのうなじを這はうように撫でる。

濃厚なキスの後、耳元で甘い声で囁かれてしまうと、先程の勢いは

どこへやらジュディーはうつとりとなつてしまった。引き続きテリーはジュディーの髪をもてあそびながら囁いた。

「あれは全部清の国に持って行くのさ。清ではあれは高く売れる。もう少ししたらここを引き払って2人で清へ行こう。贅沢な暮らしをさせてやるぞ。．．．それにしても君が俺の計画に賛同してくれるとは正直予想外のことだったな。発掘一筋の君が一体どういう心境の変化なんだい？」

既に恍惚状態のジュディーは掠れた声で答えた。

「いくら勉強していい成績を取っても男の人は可愛い子を選ぶわ。たとえ無知で何の取柄が無くともよ。いい例がスージーだわ。あの子は私にとって邪魔な存在だった。先輩なんて言って私の後についてくるのは教授の目に留まりたいから。本音はこんな先輩、私の引き立て役くらいにしか思っていないのよ。だからあなたの言う通り、発掘するふりをしていたんだわ。」

「君の努力は高く買うよ。俺達は出発点は違うけれど、行き着くところは一緒ってわけだ。．．．さあ、そろそろ仕上がる頃だ。君も出来具合を見に行くかい？」

「いいえ。私はここであなたの帰りを待っているわ。」

「そうか。それじゃ俺は大臣を誘って見に行つて来るよ。」

テリーがそう言い残し、あの洞穴に向かったのはケインとジャックがジャスミン達を助け出した3日後、つまり事件発生から6日後のことだった。

裏切られた信頼

1人残ったジユデイーは、これからの事を考えることにした。清しんという未知の国。輝かしい未来・・・それらを思うと一生の仕事と選んだ考古学さえも色あせて見えた。今までの自分が嘘だったのだ。この先泥にまみれ、汗をかいてもシャワーさえ使えない、などという生活は二度とないのだ。ああ、私は最良の道を選んだ・・・

「ジユデイー。」

有頂天になっていたジユデイーを奈落の底に突き落とすような厳しい声がした。ハツとして振り返ると、アーサーとスージーが立っていた。

「せ・せんせい！スージー！どうして？」

「今までの話、全部聞かせてもらったよ。君は何という事をしたのだ。私は一番信頼していた者達に裏切られた。テリーがあんな男だったとは・・・」

ガクツと膝を折り号泣するアーサー。その姿は威厳を湛たたえた教授ではなく、年老いた1人の老人だった。

「先輩！私は先輩を目標にしていたんですよ！そりゃ初めの動機は不純なものだったかもしれないけど、先輩を見ているうちにそれじやいけないと思って勉強も少しづつやってたんです！それなのにこんな・・・一体何故なんです！」

「スージー。あなたのような人にはわからないわ。何の取柄もない私の気持ちなんか。」

「え？」

「だってそうでしょう！あなたは何もしなくとも男の人から声をかけてくるのよ！今までだってそうだったわ。私と2人でいると決まってあなただけが注目された。私はいつも引き立て役。そんな私のことを陰で笑っていたんでしょう！でもテリーは違った。私の全て

をいいと言ってくれた。その人に協力してどこがいけないというの
！」

今までの憂さを晴らすように言葉を吐き出すジユディー。

「・・・それは・違う・・・。ジユディー・・・みんな君を尊敬して
いた。・・・ジャックやケインも君の素晴らしさを常に・・・口にし
て・・・いた。・・・ジユディー。今からでも・・・遅くない・・・本来
の君に戻る・・・んだ。テリーには・・・私が言うか・・・ら。・・・
さあ、皇女達の居場所を・・・教えるんだ・・・」

「もう遅いのよ！ジャスミン達はテリーの作った協力なアヘンの毒
で・・・今頃はもう・・・」

それだけ言つとジユディーは絶望したように駆け出した。一瞬遅れ
をとったもののその後を追うスージー。間もなく残されたアーサー
の身体が2つに折れるように崩れた。

ああッ！ジューディー！！

スージーの視線と叫び声を背中に感じながらジューディーは必死で逃げた。アーサーの号泣とスージーの想いを目の当たりにして、やっと自分の間違いに気付かされたのだ。後悔で身体が押しつぶされそうだった。

もう走れない！限界だ！と立ち止まった場所はエローラの丘。後ろは断崖・・・下を見ると鬱蒼としたジャングルが広がっている。振り返るとスージーもハアハア息を弾ませながら上ってきた。彼女も限界のようだ。

「せ・せんばい・・・待って・・・」

「何故追って来るのッ！帰ってよ！」
気持ちと裏腹の言葉が出た。

「ただだってわ・私・せん・・ばいが・・・」

「さっきも言ったでしょう！私はあなたが憎かった。だからテリーの言う通り手伝った！あんた達が来なければ私はテリーと大金持ちになって　　なのに何故邪魔をするのッ！」

自分でも次に出てくる言葉の予想がつかない程興奮しているのがわかる。

「カシミールが教えてくれたの！先輩がテリーさんと一緒にいて様子がおかしいから行ってみろって！先生も心配して一緒に行くと仰るから、教えられた場所に来てみたら、先輩とテリーさんの話を・・・」

さすがに濃厚なキスシーンを目撃したとは言えないらしい。

「わかったわ！それ以上もういい！！でもさっき言った事は本当よッ！来ないで！それ以上近付くところから飛び降りるわよッ！」

スージーはこんなに興奮したジューディーを初めて見た。一瞬たじろいだものの、心配する余りその距離を縮めた。

「来ないでって言うてるでしょう！」

「馬鹿な真似はしないで！先輩！さっき言ったことは本当だと言ったけれど、私の言った事も本当なのよ！私はずっと先輩に憧れていた。先輩がジャックを好きだったってことも知ってたわ。けどジャックは発掘のこととなると他の事は全く目に入らない人だった。だから先輩もそうしていたんでしょう？ならどうしてテリーさんなんかの誘いに乗ったの？！」

自分の気持ちの核心を突かれ、ジュディの表情が一層険しくなった。

「そ・そんな事、有り得ないわ！私は単純に考古学を勉強。」

「こんな時まで嘘言わないで！先生も仰っていたでしょう！ジャックは先輩の事尊敬していたって。お願い、戻って！以前の先輩に！」

「来ないでッ！」

もう・遅いのよ。ジャスミン達はテ

リーの作ったアヘンの毒で死んでしまったわ・・・」

「違う！きつとカシミール経ちが助けているわッ！」

「そんなことどうしてわかるのよ！・・・もういいの・・・スージー。

私はあなたが思っているような人間じゃないのよ。それに先生にも心配をかけてしまった。・・・もう元に戻る事はできないわ。

さよならスージー。先生にあなたの口から私が間違っていたと・・・謝って許される事じゃないけど・・・謝っておいてね・・・今までありがとう・・・」

次の瞬間、ジュディの身体が宙に浮いた。スージーは素早くその場所に駆け寄ったがすでに遅く、ジュディの身体はジャングルの中に吸い込まれていった。

「ジュディーーーーーッ！！」

スージーの叫び声があたりに空しく響いた。

対決（１）

ジュデイーの未来がアーサーとスージーによって打ち砕かれたとは知らないテリーは、意気揚々とジャスミン達がいる洞穴に向かった。時間を見計らってヤコブに連絡することになっていたので、召使を使って例の場所に来るよう伝言した。その時のテリーの心中は天にも上る気持ちだった。（これで俺は億万長者だ！）

だが 洞穴の入口まで来てその気持ちは突如として現実に引き戻された。扉が開いているのだ。一体誰が？・・・恐る恐る中に入り、薄暗い中を見渡すが・・・目指すジャスミンとプレナムの姿がない。（何だ？何が起こったんだ？） 動揺の余りテリーはあちこち動き回った。その姿を最初から見ていた者がいた。

「テリー様。お探しのものは既にケイン様とジャック様が宮殿に持ち帰りました。」

冷静な男の声。ギョツとして振り返ったテリーの目に、兵士を引き連れたカシミールの姿が映った。

「全て発覚いたしました。この上は速やかに私達とご同道下さい。」

「ハッ！ 笑わせないでくれよ。カシミール。一体何の事を言ってるんだ？ 私には何の事だかさっぱりわからない。」

「テリー様。私の口から言わせるのですか？あなた様と大臣が何をしていたのかを。」

「な・何のことだ。さっぱりわからん。」

テリーの額と脇の下から油汗が吹き出した。

「あくまでもシラを切るおつもりですか。わかりました。証人をここへ。」

カシミールが兵士の１人に言うと、陰のほうから１人の男が引きずり出された。

「お、おまえは！」

「も、申し訳、ありません。私は、私は。」

それは何かと不便もあるうかとヤコブがテリーに付けてくれた従者のテジャという男だった。見ると体中に傷があった。目は腫れて殆どその役目を果たしていないようだ。かなりの拷問を加えられたのがわかった。彼は許してくれと言わんばかりに両手を合わせ見えないう目を必死に開けていた。

「この男が全てを白状いたしました。テリー様、私達とご同道を。」カシミールの言葉にテリーはサツと身を翻した。その右手には一丁の拳銃が握られていた。その銃口はまっすぐカシミールに向けられている。

「こんな事が起ころうとは思ひもしなかったが、まさかの時のために準備しておいたのが幸いした。・・・どけ！」

怯む^{ひる}兵士達を尻目に、カシミールも同じように拳銃を手にしていた。

「いいですか、テリー様。私は命など惜しくありません。父の代から現王に仕え、一朝、事あらばこの身を捨てる覚悟はできております。またそういう風に育てられてきました。ですから損をするのはあなた様ですぞ！」

気迫の籠ったセリフに一瞬の隙が出来たテリーを兵士達が見逃すはずはない。怒涛のように押し寄せ、瞬く間に拘束してしまった。がつくりうな垂れるテリー。そのままカシミール達はテリーを引き連れ外に出た。ところが・・・

絶望に打ちひしがれていると思ったテリーが、身体ごと兵士にぶち当たり、言葉を発する間もなくジャングルの奥へ逃走してしまったのだ。すぐに後を追う兵士達。カシミールはスウオードの不在を悔やんだが、テリーの命が長くないことは想像できた。何故ならこの奥に入って生還できた者はいまだかつていなかったからである。

ジャスミン

あの洞穴から戻ったもののジャスミンの意識は戻らない。あの時戻った意識は何だったのだろうと思われるほどに。ケインは彼女の部屋に誰も寄せ付けず看病していた。そのお陰で皇女、プレーナム発見のニュースはごく一部の人間しか知らなかった。このまま家来達を騙し続けるのは良くないことだとわかっていたが、悪人達の陰謀を暴くには必要不可欠と判断し、表向きはまだ搜索しているふりを続けていた。

プレーナムは宮殿に戻るとすぐ元気になって、ケインの計画を手伝うと張り切る姿勢を見せたのだが、ケインは苦笑しながら「それじゃ意味がない。窮屈だがちよつとの間辛抱してくれ。」とジャスミンの部屋から一步も外に出ないよう釘をさした。

救出から3日経った。(テリーとジュディーにとっては悪魔の日になった丁度その日・・・)一日に三度毒消しの薬をジャスミンに飲ませなければいけないのだが、初めは吸い飲みで服用させようと試みたのだが全く受け付けないため、ケインはプレーナムの言う通り口移しで飲ませてみた。すると僅かではあるが飲み込むように見えた。少しづつ与える事で顔色も良くなっているようだった。

その日の深夜、(その時すでにテリーの姿はジャングルの奥地へ消え、ジュディーも同じようにジャングルに身を投じていた。)看病の甲斐があつて漸くジャスミンの意識が戻った。感激の余りプレーナムはジャスミンのベッドに覆いかぶさるように泣き出すし、ケインも又改めて神に感謝した。

「プレーナム。」

弱々しいがはつきりした口調だった。

「ひめ・・・さま・・・」

「ありが・とう。プレーナム。」

「いいえ。・・・みんなケイン様のお陰でございます。ずっと、お休みにもなられずご看病を・・・。」

プレーナムの言葉に彼女は始めてケインの姿を探した。そしてその姿をはつきりと認識すると、その両目からポロポロと涙がこぼれた。じっと見つめあう2人。泣くのをやめたプレーナムはそっと隣の部屋へ引き下がった。

ベッドに近寄り数日の間に一段と細くなったジャスミンの手を取り、額にそっと口づけするケイン。

「生きていて良かった。」

呟く声も掠れていて殆ど聞き取れない様子だった。そのままジャスミンの柔らかく長い髪に顔を埋めじっと涙を堪^こえる姿に彼女もまた呼応するようにケインの背中に回した手に力を込めた。

「ケイン様。宜しゅうございますか？」

感動が落ち着く頃合を見計らったかのように隣部屋からカシミールの声がした。

発覚

隣の部屋でプレーナムに聞いたのか、カシミールはジャスミンの意識が戻った事を伝えても、

「宜しゅうございました。」

とたったひと言っただけで、ケインを早く部屋の外に連れ出したそんな素振りを見せた。あ、うん、の呼吸でプレーナムがお薬を飲みましようね、と入ってくる。仕方なくカシミールの後に付いて行くと廊下の隅でジャックが2人を待っていた。3人はそのまま滑るように次の間に入り鍵をかけた。ケインがジャスミンの回復を告げるとジャックは目に涙を浮かべ、良かった！良かった！を連発した。「全てケイン様のお陰でございます。プレーナムも手を差し伸べる事すら出来なかったと申しております。」

少し経って感動が押し寄せてきたのか、カシミールの言葉も涙で震えていた。その顔はケインに殴られた痕が黒々と残ったままだ。事件が起きたせいですっかり忘れていたが、ケインはカシミールの顔を見たくない程怒っていた。だが今更彼を責めても仕方ないし、今回の件では神経が擦り減る程の苦労をした。それを思うと不思議なほど素直な気持ちで彼を受け入れることができた。

「カシミール、顔は大丈夫か？あの時は僕が悪かった。お前の立場も考えずつい手が出してしまった。すまない。」

「いいえ。ケイン様のお怒りはご尤もでございます。私が浅はかでございます。申し訳ございませんでした。」

そこでカシミールは一呼吸おいた。

「さて、お二人に重大な事をお知らせせねばなりません。……実は、配下の者の調査により、今回、皇女誘拐の犯人がわかりました。」

「何だつて?!」

「はい。それはヤコブ様、そしてお二人と行動を共になされていた

テリー様・・・」

「え！テリーさんが？！」

ジャックが驚きの声を上げた。ケインは以前テリーの様子がおかしいと聞いていたため、左程驚きはしなかった。

「ま、まさか・・・」

ジャックの受けた衝撃はケインの目にもいかに大きいかがあった。「ジャック様。2人だけではありません。何と、ジユディー様が途中からテリー様と行動を共にするようになったのです。」

「ええ！！」

ジャックはヘナヘナと座り込んでしまった。ケインも二の句が告げないほどのショックを受けたのだが、辛うじてとどまることができた。

「カシミール。それは本当なのか？！」

「はい。間違いございません。事実、あの洞穴に皇女達の死を確認しようと舞い戻ったテリー様を追い詰め捕縛したのですが、一瞬の隙を突かれジャングルの奥に逃げられてしまいました。ですがあの中へ入って生きて帰った者はありませんのでおそらくテリー様はもう・・・」

テリーを取り逃がした事でカシミールはずっと自責の念に駆られていた。表情がそれを物語っている。元々ケインにカシミールを攻める気持ちはなかったのだが、何と言って慰めたらいいのかわからなかった。

「ジユディー様の事は教授とスージー様に様子がおかしいのを見て来て貰いたい、と伝えましたので、お二方が何とかしてください。」

しかし彼等の誰一人、ジユディーが断崖から投身したことは知らなかった。

「そこで私達はこれからどうすべきか、ケイン様にご指示を仰ぎたいのでございます。」

ケインを見上げるカシミールの目は真剣そのものだ。

「指示？お前の主人は王だろう。僕はその役に相応しくない。」

「王より、自分にもしものことあらば、お前の判断で良いから主と^{あるじ}するお方を選び、その方の指示を仰げ。と常々言われておりました。」

「それが僕だというのか？」

「御意。」

「そうか。それじゃ遠慮はしない。ちょっと耳を貸せ。」

ケインの顔にくつつくようにカシミールは自分の耳を寄せた。ケインの方が背が高いのでカシミールは背伸びをしなければならない。

ケインも又、膝を折って何やらコソコソ・・・時折カシミールは頷きながら聞いていたが、突然パアツと表情が明るくなった。そして「ケイン様！あなた様はやはり素晴らしいお方です！」

感激の言葉を叫ぶように言うと、カシミールは素早く部屋を出て行った。

ヤコブの胸算用

（約束の時間まであと少しだ。そうすればこの谷は私のものになる。）逸る心を抑えきれず、口元が自然に綻はなんでくる。ヤコブはテリーが行方不明になったことも知らず、ソワソワと落ち着かない様子で宮殿の中を動き回っていた。（テリーは一度様子を見に行くと言っていた。その状況で知らせが早くなるかもしれない。そうだ！ここはじっと待っているべきなのだ。王たるもの、如何いかなる場合であつても臣下の者達に心の内を悟られてはならぬ。）

「ン？そち達はどこへ行くのだ？　おお、洗い場か。精が出るの
お！仕事に精を出せば良いことは必ずあるものだ。よしよし、行きなさい。」

下働き達にまで声を掛けるなど、今までなかったことまでしてしまう。それほどまでにこの3日間ヤコブの機嫌は良かった。（もし私が王になったら・・・今以上にテリーを利用し、谷の花を売り、金儲けが出来る。富と権力を手に入れたものに文句を言える者などありはしない！）ヤコブの一念岩をも通す・・・そんな勢いである。

だが・・・約束の3日目の夜になつても一向に連絡の者が来ない。おかしい。変だ。どうしても気持ちが悪く落ち着かず自分の部屋を出ようとしたその時、待ちに待った連絡係の男がやってきた。ヤコブ腹心の部下、デボンである。

「オオ！待っておったぞ。して首尾は！」

「はい。テリー様の知らせにて大臣をお連れするように、と。」
「そうか！ならばすぐ参ろう！」

ヤコブは先に立って部屋を出た。行く先はあの洞穴だった。

待ち伏せ

ケインは意気消沈しているジャックにテリーがヤコブと共に何をしようとしていたのか探ろうと勇気付け、真つ暗な外へ出た。カシミールに自分の考えを伝えたものの、上手くいくかどうか不安もあつたが、やってみないことにはわからない。人知れず洞穴に向かわなければならぬのだ。しかし灯りなしでは一步も前へ進めない程だ。するとグルグル・・・ケインの耳に聞き覚えのある音が聞こえてきた。

「スウォードお前か！お前がいればこんな闇も真昼のように進む事が出来る。スウォード、ジャスミンが捕らえられた洞穴ほじあなに行きたいんだ。僕とジャックを急いで連れて行ってくれ！」

ジャスミンを捜しにあの洞穴に行った時から何故か自分の言葉がスウォードには通じるのではないか？と思うようになっていた。人間の言葉を理解する野性のベンガルトラの存在など以前は考えられなかったのだが、今は確信して言える。少なくともスウォードだけは僕の言葉が解る・・・と。まるで乗って下さいとばかりにスウォードはケインに背を向けた。ジャックの前にも足音もさせず別のトラが近寄り、同じように背を向けた。

「ジャック、スウォード達に任せよう。」

言うが早い、ケインはサツとその背に飛び乗った。脱兎の如く駆け出すスウォード。ジャックも負けじと目の前のトラに飛び乗った。

3日前。自分達の足で来た時は遠く感じたこの距離も、4本足の疾走ではあつという間だった。洞穴の入口で降りるとまたスツとスウォード達は視界から消えた。

カシミールが来ているはずなのだが一体どこにいるのだろう。だがむやみに扉を開けることは出来ない。奴らがいるかもしれないからだ。そんなケインの思惑を察したのか、暗闇の中からケインを

呼ぶ声がした。カシミールだった。

「カシミールか？大丈夫なのか？」

「はい。まだ来ておりません。どうぞこちらへ。」

その声のする方へ向かっていくと、丁度洞穴の横にあたるところに小さな入口があった。それは大人が横になってやっと通れるくらいの細長いものだった。

中に入ると薄明かりの中、プレーナムともう1人の侍女がジャスミン達が縛られていた石柱に同じように縛られていた。

「これは一体どういうことだ！」

「ケイン様の指示通りにいたしました。」

「僕は人形を。」と言った筈だ！大切な侍女にこんな危険な事をさせるわけにはいかない！すぐ彼女達を放すんだ！」

「いいえ！ケイン様。私達が是非に！とカシミールに頼んだのです！私もこのミンミンも姫のためなら命なんか惜しくありません！」

捲し立てる様にプレーナムが言えば、ミンミンと呼ばれた侍女も同調するように力強く頷いた。

「私は5歳の頃から宮殿に上がっております。姫様のお役に立てるなら命も厭いといしません！」

彼女もプレーナムに匹敵するほどの強い意志の持ち主のようだ。

「だからと言ってこんな危険な事をして本当に死んだらジャスミンはこれからどうすればいいんだ！彼女にとってはお前達だけが友達だろう！ダメだ！ダメだ！僕にはそんなことに同意できない！すぐここから出て行くんだ！」

「いいえ！もしこのまま何もせずここから出て行かなくてはならないなら……」

プレーナムは一瞬の隙を突き、カシミールの腰から剣を奪い取った。「これでミンミン共々ここで死にます！」

必死の形相にケイン達はどうすることもできなかった。

「……お前達は……ありがとう。そこまで……わかった。お前達の思うとおりでしょう。でも！危ないと思ったらずぐ

助けを呼ぶんだ。いいね！」

ケインは仕方なく彼女達をそのままにして各々（おのおの）隠れられそうな場所に身を潜^{ひそ}めた。あとは手筈通り、虫が飛んでくるのを待つばかりとなった。

飛んで火にいる夏の虫

ホクホク顔のヤコブはデボンの案内のもと、ケイン達が待つ洞穴に向かった。こんな暗闇の中でさえも全く気にならない様子で足取りも軽く歩いていく。ワナが仕掛けられているなどとは考えてもいないようだ。普段のヤコブなら一応石橋を叩いて渡るのに、今回に限っては注意さえ払っていない。

ようやくたどり着いて扉の前に立つと、ヤコブは一つ大きな深呼吸をした。（落ち着くのだ。）と小さく呟き、ゆっくり扉を押し小声で、
「テリー。私だ。ヤコブだ。例のものはできておるか？」
と言いながら入って行った。

松明の灯りの端の方にジャスミンとプレーナムと思われる2人が縛られたままぐったりしとしていた。すぐ駆け寄ったものの状態を想像するだけで恐ろしく、触れることが出来ない。一定の距離を保ち、2人の周りを窺いながら回ってみる。ふと、テリーがいないことに気付いた。

「テリー、どこだ。勿体をつけずとも良い。」

すると突然吹くはずのない風が吹き、松明が一瞬にして消えた。ギョツとなるヤコブの頭上から低い声が響いてきた。

「ヤコブ・・・我は破壊の神、シヴァなるぞ。神聖なる場所で何をするつもりだ。」

シヴァ神になりすましたケインである。

「だ・誰だ！」

暗闇の中でもキョロキョロしているヤコブが手に取るように見える。

「お前は神である我が土地を汚して良いと思っておるのか。」

「な・何を言う！お・お前はだ・だ・誰だ！」

ケインはヤコブの声を完全に無視した。

「お前とその物陰に潜んでいるリユー・テリーは、谷の花を使つて一体何を企んでおるのだ。」

テリーがいる！そのひと言はヤコブに百万の力を与えた。

「フン！誰かは知らぬが神の名を騙る輩に何も言う事はない！」

「神をも恐れぬ不屈き者め！ 良からう。お前が真実を言わ

ぬというのならこの私が全てを明らかにしてやろう。だがその時は覚悟を決める時だぞ！」

テリーがいれば何も恐れる事はない。その絶対的な自信から相手がたとえ神であつても全く動じない。むしろやれるものならやってみろ！と言わんばかりにヤコブは仁王立ちになった。しかしケインにはヤコブ以上の自信があつた。

「お前は以前から次期王を狙っていた。初めはジャスミンを我が物にして帝位を。しかしそれが叶わぬと知るや、次の手段を探した。その時幸運にもテリーが現れた。テリーはお前がそういう気持ちでいることをすかさず見抜き、それとなく話を持ちかけた。お前には帝位を、テリーは財力を。そして誰の目にも分るほど大量の花を根こそぎ掘り起こし、全てイギリスへ持っていつてしまった。

そうだろう？テリー。」

ケインはいない筈のテリーがあたかもすぐそこに隠れているかのようには話しかけた。

しかし当然のことながら返事はない。だが今はそれで充分だった。更に続ける。

「そしてある程度目的に近付いたお前達は、次の標的をジャスミンに変更した。彼女を亡きものにして次期帝位を狙ったのだ。使うものはテリーの調合した協力なアヘン。勿論この谷から採った花の茎と根を使つて作ったものだ。ジャスミンとプレナムがそこに死んでおるわ。今から3日前のお前達の仕業しわざでな。」

（ジャスミンが死んだ？やったぞ！これで私が王だ！）暗闇の中でヤコブは小躍りして喜んだ。

崩れる自信

ところが急にヤコブが黙ってしまった。じつと天井を凝視し始めたのだ。やがてはつきりした口調で言った。

「お前はケインだな。」

ケインはカシミールに合図し灯りを点けさせた。パツと辺りの視界が開けヤコブは目を瞬^{しばた}かせた。すると目の前にケインが立っていた。「やはりお前か！この茶番は何なのだ！無礼な。客だと思えばこそいろいろ面倒を見てやったのに。これは背信行為じゃ。だがこのようなことをするからには覚悟はしているのだろうな。」

そのセリフと共にヤコブは懷から拳銃を取り出しケインに銃口を向けた。

「ああ。」

「それにしてもこのような所に1人で来るとは見上げたものよ。愛しいジャスミンがいなくなって気が触れたのではないのか？」

「そうかもしれない。ジャスミンがいなくなってからの僕は普通じゃなかった。」

「フン！それももう終わりにしてやろう。ジャスミンの後を追ってお前も死ぬのだからのお。」

「そうか。・・・わかった。僕はもうこの世に未練はない。喜んでジャスミンの後を追うよ。でもその前に大臣の口から本当の事を聞かせて欲しいんだ。冥土^{おおかた}の土産に。」

「ははは！良からう。大方は先程お前が申した通りだ。私は富と帝位を得、テリーは花を全部清国へ売り、百万の富を得ると言っておった。のお？テリー。それに間違いはないの？」

いる筈のないテリーに向かってヤコブは問いかけた。勿論それに対するの返事はない。

「テリー！何故返事をしない！」

苛立ったヤコブの声が空しく響く。

「大臣。僕が何故ここにいるのか疑問に思わないのか？」

初めてケインはヤコブに不安を抱かせた。

「もついいだろう。」

それが合図となってジャックがヤコブの腹心の部下、デボンを捕らえて石柱の陰から現れた。続いてカシミールと兵士達も意外な人物を伴って現れた。

瀕死の状態にあった筈のムファド王を椅子に寄せ、啞然とするヤコブを尻目に中央に出て来たのである。

「ア・ア・・・義兄上あにっえ・・・ま・まさか・・・」

「ヤコブ。今の話しは真まことの事なのか。」

口調も以前のままと同じだ。

「な・何を仰る！全部この者、ケインの作り話でございます！どうか信じならぬようお願い申し上げます！テリー！！お前も義兄上あにっえに申し開きをするのだ！」

「大臣。テリー、テリーと先程から仰っておられますが、彼が一度でも大臣の問いかけに返答いたしましたか？彼は企てが発覚したとみるや、ジャングルの奥地へ逃げ込み行方知れずになってしまいましたよ。」

あくまでもケインは冷静だ。それに引き換えムファド王の元気な姿を見せ付けられ、尚、テリーが行方不明になったと知らされたヤコブは、一遍に奈落の底に引きずり下ろされてしまった。

「あ・義兄上あにっえ！　い・いつ本快ほんかいなされたのです？」

それだけ言っのがやっとだ。

「本快？私は初めから倒れてなどおらぬ。全てそなたの悪事を暴くため、そこにおけるケインと相談してやったことじゃ。」

ケインを見つめる王の目は優しさに満ちていた。

「んぐぐぐ！・・・何と言う事だ！しかし、証人も証拠もないのにどのようにして立証なさるうとしておられるのです。」

この後に及んでも尚、強気のヤコブ。とその時。

「証人ならここにおりますわ！」

さっきまで死んでいたとばかり思われていたプレーナムが立ち上がった。

「プ・プ・プレーナム！おまえ！　するとそっちは！」

「侍女のミンミンです！」

愕然とするヤコブ。一旦崩れかけた身体を何とか立て直し、ミンミンをぐいつと引き寄せると突然持っていた拳銃を彼女のこめかみに当てた。彼の指が少しでも動けば一瞬にしてミンミンの命は奪われてしまう！！

だが次の瞬間。ヤコブの瞳に信じられないものがはつきりと映し出された。

対決（２）

「オ・オピウム・・・」

一瞬の虚を尽きケインの蹴りがヤコブの持っていた拳銃を吹き飛ばした。間一髪危機を逃れたミンミンは素早くプレーナムの側に駆け寄った。

油断し、拳銃を取られ人質を逃がしたヤコブは、短剣でケインに襲い掛かった。それをみたデボンも息を吹き返したようにジャックの腕を払い応戦に出た。

ケインは父ジェイムズが旅の途中で学んだ拳法を幼少の頃から習っていたので、武器を持っていなくても難なくその反撃をかわす事が出来たのだが、ジャックは普通の幼少時代を過ごしてきたため捨て身のデボンに押さえ込まれてしまった。それを見たカシミールはジャックの加勢に加わり、今度はケインとヤコブ、カシミールとデボンという主従それぞれ一騎打ちとなった。ほぼ中央でケインはヤコブの攻撃を左右によけながらかわしていたが、やけになっているヤコブの剣は、隙のないケインにとっても十分脅威に値した。

「ハッ！」「ハッ！」

1つ1つの技に気合が入る。

「ハアハア・・・」

目藏めつぽう突きを出していたヤコブの息が荒くなってきた。頃合を見計らってとどめの蹴りをヤコブの大腿部に喰らわせた。

「ウッ！」

とうとうヤコブも力尽き、王の兵士に捕らえられた。

カシミールとデボンは小さい頃からの因縁があったらしく、怒鳴りあいながら殴り合っていた。

「お前があの時、王妃様から頂いたお菓子を多く取ったんだ！」とか、

「お前がハヌマーンごっこをしていた時ズルしたんだ！」
などと辻褃の合わない事を口走っていた。

ケインは彼等をそのままにしてヤコブと同じ目の高さになるように膝をついた。

「大臣。いえ、伯父上。たとえずつと会った事がなくとも今、僕はそう思っています。さっき母の名を口にしましたね。あれは僕の額を見たからではありませんか？僕の母、オピウムも同じ形のアザがあった。そうですね？これを見て母を思い出したのでしょうか。僕の場合、何かで気持ちが高ぶった時にしか現れないので今まで気付かれなかったんだと思います。それで隙が出たのでしょうか？」

「ヤコブ。そちを騙すような真似をしたのは全て私の命令だ。恨むなら私を恨め。だがそなたのしたことはこの谷始まって以来の大罪ぞ。その事はわかっておろうな。処罰は詮議の上決定する。

連れて行け！」

王の言葉は威厳に満ちていた。屈強な2人の兵士がヤコブの両脇をしつかりと押さえ、前後左右を数人の兵士が取り囲むように並ぶと、そろそろ白み始めた外へ出て行った。

ケインと王

彼等が出て行くと残ったのはケイン、王、ジャック、カシミール、プレーナム、ミンミンの6名になった。静寂が彼等の周りを覆うと、ムファド王はゆっくりとケインに視線を移した。皆が呆然とするなか、ジャックだけは何故かソワソワしている。

「…………ブマーマグプタ…………いや。今はケインだったの。よくやってくれた。礼を言うぞ。これで私は引退できる。私の後継者はそなただ。」

王の口からはつきりと次期王はケインだと告げられると、全員が歓喜の声を上げた。しかし当のケインの表情は冴えない。

「いかがでした？私の後では不服か？」

「陛下…………1つお尋ねしたいことがあります。」

「何だね？改まって。」

「陛下は大臣の処遇をどうなさるおつもりですか？」

「思いもよらぬ質問に王の顔が強張った。」

「今はそれを論ずべき時ではない。」

「ならば僕はあなたの申し出を受ける事は出来ません。」

「どういう意味だね？」

意外な展開に王は混乱している。それがはつきりと肌で感じられるように空気がピリピリしてきた。

「陛下のお考え1つで僕は準備が出来次第イギリスへ帰る。ということです。」

「私を脅しているのか。」

「いいえ。元々僕はこの谷の人達にとってよそ者にすぎません。その僕がたとえ血の繋がりがあからといえ突然王になったとしたら？谷の人達はどう感じるでしょう。また何故ジャスミンが王ではないけないのでしょうか。そして大臣を推していた一派からあなたは猛反

撃を受けるかもしれません。そうなった時苦しむのはジャスミンです。きっと彼女は僕を守ろうとするに違いありません。でもそうすれば彼女が追い込まれていくのは明らかです。そんな彼女を見る事は出来ない。そうならないためにも今、この時の処理を伺いたいです。」

落ち着き状況を見据えたケインのひと言ひと言が全員の胸に響いた。「ケイン！私の後継者はやはりお前の他はいない！カシミール。私とお前の目に狂いはなかったぞ！」

固い表情から一変して王の顔つきが歓喜のそれになった。

「陛下！私も陛下と同じ気持ちでございます！ケイン様！あなた様を於いて他に次の王に相応しいお方はございません！」

カシミールの目には感激の涙が浮かんでいた。

「ケイン。改めて問う。そなたならこの一件どう処する？」

「助言を求めておられるのですか？」

「左様。」

「あくまでも助言という形でなら・・・僕は大臣を処罰という形ではなく別の方法で処理したらいいのではないかと。たとえば、そうですね・・・制裁で充分だと思っのです。まずテリーさんと組んで得た財力は全て没収し、更にこの谷から奪われた花を全部元通りにしてもらう。そのための労働をさせるということです。ここはボンベイからも離れていますし、二度と悪いことが出来ないよう、村人達一人一人に監視してもらうのです。勿論、元大臣という肩書きがあるので村の人達は最初は遠慮するでしょう。遠慮しているうちはまだ良いのです。それが無くなった時大臣がどう出るかによって彼自身の信用を得られるかどうか。その時間が彼を罰してくれるのではないか・・・」

そこでケインはため息をついた。

「これはあくまでも僕個人の考えです。ですから陛下のなさりたいようにして頂ければ結構です。」

「でもケイン様。もし陛下がヤコブ様の処罰を断行する、と決断さ

ればあなた様は帰国なさってしまわれるのでしょうか?」

プレーナムが心配そうに聞いた。

「いいや。そういうことではないよ。僕が言いたいのは、悪い事をした人でも改心する機会を与えてやるべきだということであって、そういう意思のある者を簡単に罰するべきではないということなんだ。」

「でも結局はそうなさるんでしょう? もしそうなら姫様はどうするんですか? 残された姫様は?」

気丈なプレーナムもジャスミンの事となると涙腺が緩むようだ。

「彼女ならきつとわかってくれると思う。そのために僕達の絆が途切れようと現実を見つめてくれるよ。」

「えっ?!」

全員がまた驚きの声を上げた。真っ直ぐ王を見つめるケイン。じっと見つめ合う2人。静寂が辺りを一層覆う。

最初に視線を外したのは王の方だった。

「ケイン。先程の私の言葉を忘れたらしいの。私はお前しかいない、と言った筈だ。お前の決^{けつ}でヤコブを処^けそう。今まで私は悪事を働いた者は全て厳罰に処してきた。これからは最早^{もはや}そのやり方は適用しない方が良くのかも知れぬ。カシミール。早速ヤコブにそう伝えよ。」

「陛下!!!」

「駄目だ! もう決めたことだ! ここからは私のやり方でやる。カシミール、行くのだ!」

「はい!」

嬉しそうに走り出て行くカシミールを見送ると、同じように嬉しさで体中はちきれそうなプレーナムとミンミンが王の側に寄り添った。

「ケイン! こっちに来てくれ!」

先程からおとなしかったジャックが突然叫んだ。

重なる不幸

ジュディーの最後を見てしまったスージーはその場で泣き崩れ、涙が枯れてしまうのではないかと思うほど泣いた。そのうち何に對して悲しいのかわからなくなってしまった。フラフラと立ち上がり、鼻歌交じりにヨロヨロ歩き出した。

どれ位の時間が過ぎたのかも分らない。漆黒の闇の中、時々踊ったり止まったした。時折大きな声で歌った。他人の目で見たら、スージー本人がが狂っているのか、とさえ映るような足取りだった。ボスツ！突如、何かが彼女の足に当たった。

「イッタイなあ。……アレエ？　せんせい。何でこんな所に寝てるの？」

スージーがぶつかったのはアーサーだった。ところがかかなり勢い良くぶつかったのに返事がない。そして微動だにしない。

「先生。先生つてばあ！」

スージーはその身体をグリグリ揺すった。だが……。ようやくおかしい、変だ。と正氣に戻った彼女はアーサーの顔に手を当てた。しかし既にその顔は冷たくなっていた。まさか、と彼女は腕の脈を取ってみた。……。ない……。今度は胸に耳を押し当てた。……。しかし彼の鼓動は聞き取れないばかりか全く感じる事が出来なかった……。しかもアーサーの身体は二つ折りになったまま既に硬直していた。

「先生！！うああああ！！！」

もう涙なんか出ないだろうという程泣いたのに、また新たな涙が両目から流れ出した。度重なるショックに彼女はアーサーの身体に折り重なるようにして氣を失った。

発見

「え？」

ジャックに呼ばれ中途半端な気持ちのままケインは彼に近寄った。

「見るよ、これ。」

その指差す方向を見ると、今まで何故こんな大きいものに気付かなかったのか？と思えるような石の建造物があつた。

「これは？」

「テンプル！お寺だよ！たぶん教授が言っていた新しい石窟寺院だ！もしかしたらこれだけじゃなくてこの奥にもあるかもしれない。わからない？んー！何て説明したらいいんだ？つまりだ、もつとたくさん寺院があるかもしれないってことなんだ！ケイン、これが本当なら俺達はどうとうやっただってことなんだ！大発見をしたってことさ！」

狂喜乱舞するジャック。

「本当か！ジャック。君の、いや君達の説は正しかったってことがこれで証明されたんだろ？すごいじゃないか！やったな！」

ケインも友人の大発見と一緒になつて喜んだ。

「い・いや。まだはつきりそうだとわかったわけじゃないんだ。そうだと仮定すればすごい事なんだ！」

謙遜するジャックだったが、その言葉には自信に溢れている。しかしムファド王、プレーナム、ミンミンの3人だけがこんなもので何をこんなに喜んでいるのか、と訝^{いぶか}しげな表情で2人を見ていた。それに気付いたケインは事のあらましを今までのジャック達の苦労話などを交えながら説明した。

「あ！教授にこの事を知らせなければいけない！そうだ！ボヤボヤしてなんかいられない！ケイン、皆さん！申し訳ないが私は一足先に失礼します！」

言うが早いかジャックは外に飛び出した。開いた扉から朝日が差し

込み、4人の足元を照らした。

訃報

ジャックに遅れること1時間。カシミールが手配した兵士達と共に王、プレーナム、ミンミンと宮殿に戻ったケインは、何やら重苦しい雰囲気を感じた。すすり泣いている侍女もいる。通りがかった者に事情を尋ねると、アーサーとスージーが変だ、というだけでさっぱり要領を得ない。ジャックが戻ったはず、と言うとスージーの部屋にいるということだけはわかった。胸騒ぎを覚え、すぐスージーの部屋に駆けつけると、部屋の隅で小さくうずくまっているジャックの姿があった。

「ジャック？」

呼んでみたが反応がない。肩に手を掛け更に彼の名を呼んだ。するとジャックの身体がピクツと動き、ようやく顔を上げた。

「一体どうしたんだ。教授とスージーに何があったんだ？」

「ああ、ケインか。教授が亡くなったんだ。」

他人事のように答えるジャック。

「え?!」

教授が亡くなった?いつ?どうして?

「ケイン、俺、おかしいだろ?こんなすごい事をこんなに簡単に言えるんだぜ。悲しいはずなのに涙も出ないんだ。なあ!俺変だろ?!」

ジャックはケインの胸元を掴みグラグラ揺すった。

「ジャック……」

「ウワー!!!」

そこで初めてジャックが泣き崩れた。

その声でベッドに寝かされていたスージーが目を覚ました。

「ここは?」

「スージー。僕だ、ケインだ。わかるか?」

「あ、ケイン。どうしたの?私、どうしてこんな所にいるのかしら

？」

「起きなくてもいいよ。．．．ねえ。それより聞きたい事があるんだけど、いいかな？」

「聞きたい事？ええ、いいわよ。何かしら？」

「教授の事なんだけど。」

「先生の事？何？」

「何って。君、ずっと一緒だったんじゃないのかい？」

「ええ、そうよ。先輩も一緒だったわ。それがどうかした？」

「教授が亡くなったと聞いたんだけど、詳しい話、聞かせてくれな
いかな。」

「え？先生が？嘘よ。ケインたら嫌ね。私をからかうのもいい加減
にしてくれない？」

そう言つてベッドから立ち上がるスージーには特段変わったところ
はない。足取りも軽く部屋から出てアーサーの部屋に向かった。ケ
インもその後を追ったが、ジャックは相変わらず呆然としたままし
やがみこんでいた。

アーサーの死

アーサーの部屋では谷に来てからずっと彼の世話をしていた侍女達が、オイオイ泣きながら死後の世界へ旅立つ亡骸^{なきがら}を花と綺麗な衣装で飾っていた。しかしそれらを見てもスージの表情には何の変化もない。ケインにははっきりとアーサーの死が感じられたというのに。

「まあ！あなた方は一体何をしているの？ 先生・・・アラ？ 先生、こんなにベッドを綺麗にしてもらって・・・いやだわ、みんな。どうしたの？ 先生寝てるだけじゃない。まるで死んだ人みたいなことしないでよ。」

「スージ、君・・・もしかしたら記憶がないのか？」
先程からの彼女の言動は記憶の消失としか説明の仕様がないないと思えた。

「記憶？何を言うのケイン。私はあなたの事もジャックの事もこの谷へ来た事も覚えているのよ。それを記憶がないなんて、失礼にもほどがあるわ。」

「じゃあ聞くけど。さっき君はずっと教授と一緒にだったと言ったね。その教授が亡くなったのに何故その理由を、いや、死の事実を知らないんだ？」

「だからあ！先生は死んでなんかいないのよ！ホラ！！」

スージはアーサーの顔に触れた。ヒヤツとした触感に驚き手を引込めたものの。今度は両手でその身体を確認してみる。冷感と同時に異様な身体の強張りにようやくおかしいと気付いた。

「ねえケイン。一体どうしたの？ 先生冷たいし何だか硬いわ。」

「スージ。たぶん君は教授の死にショックを受け一時的に記憶を無くしたんだよ。・・・いいかい、よく聞くんた。教授は亡くなっただ。死んだんだよ。おそらくその理由を知っているのは君

とジュディーしかないと思う。 ジュディーは何処どこにいるんだい？」

「ジュディー？・・・ジュ・・・ヒイイイ！！」

スージーは突然何を思い出したのか、天を貫くような悲鳴を上げ、ものすごい勢いで暴れだした。咄嗟のことで一瞬たじろいだケインもすぐ体制を建て直し、その身体を押さえ込もうとした。だが、狂人のような力で暴れ回るスージーに手も足も出ないような有様だ。

「スージー！いい加減にしろ！！」

大喝するケイン。その声にハッと我に返り、ようやく記憶が戻ったのか次にケインの胸に飛び込み大きな声で泣き始めた。理由はまだわからなかったが、ケインはスージーをそのまま受け止めることで彼女の気持ちが落ち着くのを待った。

悲しい結末

ケインの胸で精一杯泣いて少し落ち着いたのか、スージーはポツリポツリ話し出した。ケインは近くにあった椅子にスージーを導くと一緒に腰を掛け、勇気付けるように背中をポンポンと優しく叩きながら話を促した。まるで泣き止まない赤ん坊をあやすように。

「・・・カシミールに言われ、先生と私は先輩のいる場所へ行ったわ。するとテリーさんと先輩が2人の将来について話していたの。これから清しんの国へ行き、ここの花をどんどん売って今以上に金儲けをするという内容だったわ。しばらくするとテリーさんがどうなったか見に行くと言ってどこかへ行ってしまった。驚いた私達は慌てて先輩の前に姿を見せたわ。先輩も驚いた様子だったけれど、先生の今ならまだ引き返せるという言葉にいたたまれなくなつたのがエローラの丘。そこでテリーさんの向かった所がジャスミン達を殺そうとしている場所だと聞かされたの。私、止めようとしたのよ！それなのに先輩はもう遅いと言って・・・断崖からあのジャングルに・・・そのあと私、わけがわからなくなつて・・・きつと歩いていんだと思うの。そしたら何かが足に当たって・・・見てみると先生だった。寝てるのかと思って触ったら冷たくって・・・」

一気にそこまで喋るとまたその光景を思い出したのか、ケインの胸に顔を埋め、声を上げて泣き出した。安心させるためにケインはその身体をギュッと抱き締めた。

「わかった。もういい。あとは僕達が何とかするから君は安心して休むんだ。いいね・・・彼女を部屋へ連れて行ってくれ。」

側にいた侍女にスージーを頼むと、ケインはその足で王の部屋へ向かった。

王の部屋

ケインの口から事情を聞いたムファド王は、すぐカシミールを呼び寄せた。傍には漸く歩けるようになったジャスミンが控えている。

「お呼びでございますか。」

「うむ。今、ケインから教授とジュディーの件を聞いた。ヤコブとテリーの悪巧みのせいで他の2人の命が消えてしまった。やはりヤコブの処罰を再考した方が良いかもしれぬ。良いか？」

次期王と自ら認め内々で発表したためか、王はケインに同意を求めた。元より状況が変わって新たに犠牲者が増えたとあってはさすがのケインも王の決定に異存があるはずはなかった。同意を表すように頷く。

「断罪にすべきところなれど、これ以上この件で血が流されるのは耐えられぬ。よってヤコブをこの地から永久追放とする。無論財産を全て没収の上でじゃ。……良いか？ケイン。」

「陛下のご随意に。」

「決定！カシミール。すぐこの決定をヤコブに伝えよ！その上で即刻あ奴を追放するのじゃ！」

「御意！」

「これで良かったのかの。」

カシミールが出て行くと王は呟いた。それに呼応するかのようにケインも独り言のように呟いた。

「僕も密かに国外追放を、と考えていました。陛下がああ仰つたので内心ホツとしたところです。確かにこれ以上人が死ぬ事は避けるべきです。教授の亡骸は手厚く葬ってあげましょう。」

その2人の姿を後ろから見ていたジャスミンは、離れて幾年時を過

ごしても尚、彼等の間に深い血の繋がりがあゐるのを感じ取つていた。

告白

地下牢に軟禁されていたヤコブは、王の決定をカシミールから聞かされると驚きの表情を見せた。断罪は免れぬ。と覚悟していたのに国外追放だとは・・・王の心にどんな心境の変化があったのだろうか？その問いにカシミールはケインの影響だろう。と答えた。

当初、王の下した決定は、テリーによって齎もたらされた金品は没収の上、谷の花の復興に努めるなら罪には問わず。というものだった。それはケインの提案であり、それを王が推奨したものであった。それを聞くとヤコブはしばらく黙って牢の土壁をじっと見つめていたが、突然ケインと話がしたい、と言い出した。それは許されぬ、即刻追放しろ、と王から命じられている。とカシミールが冷たく言い放つと、何としても話さねばならない！と頑として譲らず、そのまま瞑想にふけってしまった。

仕方なくそのことを王の部屋にいたケインに伝えたと、危ないから止めて、というジャスミンの言葉も聞かずケインは地下牢に足を運んだ。

ヤコブはケインが姿を見せるなり2人きりにしてくれと言った。ケインが目で合図すると兵士達も自分達の持ち場を離れた。

2人になるとヤコブは目を開き、じっとケインの顔を見つめた。しばらくするとその両目から涙がこぼれ落ちた。どうしたのだろうか、とその訳を尋ねようと一歩前に踏み出すと、途端にヤコブは声を押し殺すように泣き出してしまった。両手、両足を鎖で繋がれている為、顔を覆うこともできず、ただ大粒の涙が頬を伝って流れ続ける。仕方なくケインはヤコブの気持ちが落ち着くまでじっと待つことにした。

どの位時間が経ったのか地下牢の中では分らなかったが、兵士達が様子を窺いに交替で何度か姿を現したのを見ると、かなりの時

間が経ったのだらうと推測された。それを察したのかどうか、ようやくヤコブは顔を上げ、ゆっくりと話し出した。

「……ケイン。私はお前が生まれるよりも前に姉と共にこの地にやって来た。姉はムファド皇子、今の王の妃として、私は護衛も兼ね、臣下の一員として。あの頃は婚礼の日になるまでお互いの顔さえも知らなかった。私は何度か前王や皇子に事前に会っていたが、家族達と会ったのは婚礼の当日が初めてだった。その時不思議なアザを持った少女、すなわちそなたの母、オピウムにあるうことが一目で虜になってしまった。その後義兄となった皇子や姉にオピウムを私の妻に欲しいと願い出た。姉夫婦は乗り気だったのだが、前王と肝心のオピウムが承知しない。そうこうしているうちにあの2人、ジェイムズとバーナードがやって来た。ジェイムズが言葉巧みに誘ったんだらう、オピウムは奴と一緒に言い出した。すると手の平を返したように皇子も賛成しだした。相変わらず王は反対していたが、オピウム可愛さの余り、とうとう承諾してしまった。それから五年。お前が生まれ、2人は一層幸せになった。ところが原因不明の病が発生し、数多くの村人が死んだ。神がやると私に力を貸してくれた、と思った。時を見計らい、よそ者がいるからこんなことが起こるのだ。とデボンに噂を流させジェイムズ親子を追い詰めこの地から追い払った。今度こそ！と傷心のオピウムを慰め、己が妻にと試みた。結果……それまで以上に彼女から疎まれるようになってしまった。それからというもののオピウムは他家へは嫁がず、一生1人のまま……そしてお前がここに来る前に死んでしまった。生きる糧を無くした私は、ジャスミンにそれを求めた。だがそれも叶わぬと知ると、どうしても王になりたいと願うようになった。どんな手を使っても王にならねば私の生きる意味がなくなる！その一心で一度は妻に、と願ったジャスミンをさらったのもその気持ちからだった。しかしお前のアザを見た瞬間、心の中に隙が出来て墓穴を掘ってしまった。”汝、2つの月が出づる時、全ての民は救われる”お前が来るまでのこの谷は一見平穏だった。だが私がい

るせいでどれだけ現王が苦しんでいたかわからぬ。2つの月の意味はそういうことだったのだろう。結局私の人生はオピウムに始まりオピウムで終わる。ということなんだろうか・・・フフフフ・・・ハハハハ・・・」

天井を仰ぎ、高笑いするヤコブの声が空しく響いた。

前からずっと・・・

ヤコブの悲しい、しかし第三者から見れば身勝手な告白を聞き、やるせない気持ちのまま王の寝室に戻ったケインは、言葉を選びながら王と彼の安否を気遣いながら待っていたジャスミンに事の仔細を報告した。

話も終わりに差し掛かった頃、廊下で侍女と兵士達のわめき声が聞こえてきた。それもこちらの方へどんどん近付いてくる。彼等の声の合間にケインを呼ぶ声も混じっていた。耳を凝らすとそれはスージーのもののようだ。

ケインとジャスミンが廊下に出ると、それはやはりスージーで、ケインの姿を見つけると一目散に走ってきてそのまま抱きついた。

「ねえ、ケイン！もうこんな所イヤ！早く帰りましょう！私あなたと一緒にならジュディーや先生がいなくても生きていけるわ！私ずっと前からあなたが好きだったの！ジュディーはジャックが好きだった。私ジュディーの後輩というのを利用してあなたに近付いたの！ねえ！もうイギリスへ帰りましょう！」

涙ながらの大告白にそこに居合わせた全員が啞然となった。更にスージーはありったけの想いを込め、呆然としているケインに濃厚なキスをした。それをまざまざと見せ付けられたジャスミンは何も言わず走り去ってしまった。そこで我に返ったケインはスージーの身体を押しのけるとすぐジャスミンのあとを追った。そのあとを追うスージー。そのまたあとを追う侍女と兵士達。

ベッドに横たわり一部始終を見ていた王はニヤリと笑い、更にポツリと呟いた。

「モテる男は辛いのお。ケイン。」

熱いもの

「待てよ！ジャスミン、待てったら！！」

以外に足の速いジャスミンに驚きながらも、部屋に付く頃には追いつき、中に入るとケインは素早く後ろ手にドアを閉め鍵をかけた。後から来るスージーを入れないためもあったが、何よりここではつきりさせておかなければならないと考えたからだ。

ジャスミンはベッドに身を投げ出すように倒れ、その傍に近寄り腕を取ろうとしたケインの手を逆に跳ね返した。

「ジャスミン聞いてくれ！」

ケインの必死の言葉にも首を横に振るばかり。

「じゃそのままでいいから僕にも釈明させてくれ。確かに僕達4人は大学でも仲が良かった方かもしれない。けどジュディーがジャックを好きだった事も、増してスージーが僕を好きだったなんて全然知らなかったんだ。だからさっきは本当に驚いた……」

その言葉に嘘はなかった。現に声のトーンが段々と落ちていくのが分った。

「でもスージーはそうじゃなかった！」

「本当に知らなかったんだ。信じてくれ。」

ジャスミンはケインの傍から逃れるように部屋の隅に移動した。

「いいのもう！いずれあなたもお帰りになるのでしょうか。」

「だから僕の話聞いて言ってるだろう！！」

バン！と彼女の身体を挟むように壁を叩く。怯えながらその顔を見上げるジャスミン。目と目が合った。お互いの瞳の奥に熱い情熱がほとばしる。その時ジャスミンはケインのアザが今まで見たどの時よりも鮮やかに浮き上がっているのを見た。

ケインはジャスミンの顎を上げ、スージーが自分にしたよりも尚激しいキスをした。今まで数回ケインのキス（口移しで薬を飲んだのも含め）を受けたジャスミンだったが、これは比べものにならないか

った。

「やめて・・・」

辛うじてそれだけ言うと更にジャスマンは逃れようとした。だがもう止められない。

「駄目だ。　離さない。」

ケインの声も掠れている。

「スージーが来るわ・・・」

「大丈夫だ。兵士達が取り押さえている。」

「駄目よ!!」

逃げようとするジャスマンの腕を押さえ、ケインは部屋中の灯りを消した。

ケインの腕の中でジャスマンは幸福感の絶頂にいた。ケインも又同じ気持ちだった。

「僕はここに残ろうと思っている。王から後継者に、と言われた時は驚いたけれどそんな事は問題じゃない。だから君とこうなった事について謝るつもりはない。僕は・・・」

そこでケインは一呼吸置いた。

「僕は君を愛している。それがここに残る最大の理由だ。　君

は？君は僕をどう思っているの？」

「・・・わたくしは・・・あなたと出会う前からずっとあなたを・・・
お慕いしておりました。」

ほんのり頬を赤く染め、ジャスマンもケインの心に応えた。

「じゃあ決まりだ!」

そこで身体を起こすとケインは姿勢を改めた。

「ジャスマン。僕と結婚して欲しい。いとこ同士だと言われようとも構わない。僕は生涯君だけを愛すると誓うよ。」

力強いプロポーズの言葉に涙をこらえきれず、両手で顔を覆うジャスマン。しかしその涙の本当の理由を知る由もないケインは、次に彼女の口から出た言葉に愕然となった。

意外な告白

「ケイン様。今まで隠していた事があります。……わたくしは・・わたくしは・・現王である、父、ムファドの・・・・実子ではありません。」

涙でボロボロになった顔をものともせずジャスミンは語り始めた。

「えっ?!」

（何故彼女はその事を知ってるんだ!）

疑問が黒い渦となって彼の心を覆った。

「ごめんなさい。今まで黙っていて。……わたくしがこの事実を知ったのは7歳の誕生日を迎えた日でした。お父様の部屋へ誕生の挨拶に行くと、お父様とカシミールの父、デリルが2人で話していたのです。実の父親が。というような内容でした。それまで実の父と慕ってきた方が本当は違っていたという事実は、わたくしにとって非常にショックな出来事でした。それ以後の父のわたくしへの慈しみがなければ今のわたくしはなかったでしょう。ですからわたくしもその事は考えまいと心に決め、今日まで生きてきたのです。けれどあなたにさきほどいと同じ土でも構わないと言われた瞬間、これではいけない、真実を告げよう。その上であなたの決定を受けなければならぬ、と思ったのです。」

「……それで君は、僕がそれほどの重大事を黙っていた人とは結婚できない。と言ったらどうするつもり?」

既にその話を知ってるという事実を悟られまいと彼は努めて冷静に聞いた。すると彼女の肩がブルツと震え、大粒の涙がポロポロとこぼれた。

「そ　その時は　わたくしは・・・」

それ以上言葉が続かない。ケインは彼女の傍に腰を掛け、そつとその肩を抱き寄せた。

「悪かった。君があまりにも真剣だったからちよつとからかってみ

たんだ。僕はたとえ君が誰であろうとこの意思を覆すつもりはないよ。エローラの丘であの悪巧みを聞いたときからどんな事があっても君を守ろうと決めたんだからね。何も心配しなくていいんだ。

そんな事で悩んでいたのか。僕がもう少し早く気付いてやればこんなに苦しませずに済んだのに。ごめん。……さあ、もう何も考えず少し眠った方がいい。」

ベッドに横たわる彼女の額に優しくキスをし彼女が眠るまでその手を握ってやった。完全に眠ったのを確認すると、ケインは王に会うため部屋を出た。廊下はさきほどの喧騒が嘘のように静まり返っていた。

真実（１）

（これからどうすればいいのだろう。）

自問自答を繰り返しながらケインは王の部屋へ向かった。

「陛下、少し宜しいでしょうか。」

ケインが入っていくと、王はカシミールと話し込んでいた。ふと彼はさっきまでの行動全てが既に王の耳に入っているのではないか、と思った。しかし今となつてはそんな事はどうでもいいことだ。自分はこの谷に残つて彼の後継者になることにしたのだから。今更ジャスミンとの関係がバレたからといって慌てる必要はない、そう思い直した。

「おお、ケインか。構わぬ。」

カシミールはそれを汐に出て行つた。

「何じゃ？用向きというのは。」

「僕はこの谷に残る事に決めました。」

「おお！それではジャスミンと一緒に私の後を継いでくれるというのじゃな？！嬉しいぞ！ケイン。」

「はい。そこで陛下に伺いたいことがあるのです。僕は真実が知りたい。僕の問いに答えていただけますか？」

真剣な彼の表情も今の王には通じない。ホクホク顔を見ただけでもそれが窺えた。

「何じゃ？」

「単刀直入に伺います。ジャスミンの本当の父親は誰なんですか？」
思いもよらぬ質問に王の顔つきが変わつた。

「誰に聞いた！！」

「僕には聞く権利があると思います。」

「誰に聞いたと言つておる！！」

「この秘密を知っている者が誰かお考えになれば明白でしょう。誰

かは僕からは言えません。」

「うっうっむ！！ カシミールか！！ カシ！」

「陛下！彼をお呼びになつてどうなさるつもりです！それよりこの秘密をジャスミンが知っていた、ということを陛下はご存知でしたか？」

「何と！何と申した！」

「ジャスミンは自分が王の実子ではないと言つてました。7歳の誕生日に陛下がデリルとここで話されていたのを聞いてしまった。と告白してくれました。ただ陛下の自分に対する態度が全く変わらないのでそれを忘れようとしたそうです。だからこそ、僕には真相を聞く権利があると思うのです。お願いです！陛下。もし真実を話して下さったのならそれは一生この胸の奥に収め、誰にも話しません。教えてください！陛下。」

「・・・・・・そなたのアザはもう隠れることはないのかの・・・
・ジャスミンの肌は美しくキメが細やかであつたろう？そのアザが消えないのは、そなたの愛が余程強かつたという証拠じゃろう。
・あの子の肌の美しさは母親よりもむしろ父親の血をより強く受け継いでいる。私は皆にその秘密が判らぬように注意を払つてきたつもりじゃつた。それなのに・・・臣下の者は誰一人、気付かなかったのに。肝心なあの子に知れてしまうとは・・・約束してくれるか？これから話すことはあの子のみならず、誰にも話さぬと。」
王は握った手に力を込めた。ケインは期待に応えるように無言で頷いた。

真実（２）

「……ジャスミンの母親がここに嫁いで来たのは２年前の事だった。当時私はまだ皇子であつたが、次期王になることは既に決定しておつた。婚礼の祝典は７日間続いた。だが私にとつてそれは地獄のような７日間じゃつた。何故ならそれが終わり、妃と２人になつた時こそ己が秘密を明かさねばならぬのだから。カシミールに聞いたのなら今更それが何であるか言わなくとも良からう。……そなたにはそういう病はないか？」

「いいえ。僕は……」

「そうか。それなら良い。もしかするとジャスミンはもう母親になたかも知れぬな。……あの時の悔しさは誰にも理解してもらえぬだろう。いよいよその時がやって来た。私は寢所に入り、妃と２人きりになつた時、どうせわかることだからと正直に事実のみを伝えた。話が終わると妃は私を責めることもせず声さえも立てず泣いた。それを見た私はわが身の不幸を思い一緒に泣いて泣いた。一応床入りは済ませたが、妃の悲しみは私の想像をはるかに超えていたのだ。それからというもの何かに取り付かれたかのように薬草にのめり込んだ。おそらく私の病を治そうとしたのだろう。あらゆる草花を育て始めた。それから２年後、ジェームズが現れオピウムと結婚するや否やそなたが生まれた。それが妃の悲しみを一層深いものにした。無論表には出さぬが私にはそれが痛いほどわかつた。それまでより薬草に力を傾けるようになったからだ……」

そこで王は一息ついた。疲労感がどつと押し寄せたように見えた。ケインは王が話し出すまでじつと待つことにした。

真実（3）

「更に5年。ジエームズ達がここを去ったのを機に兼ねてより私が考えていた計画を妃に話した。別の男の子種を貰って跡継ぎを産んで欲しいと。妃は驚いたが後継者がいないのではこの谷は滅亡してしまう。それを盾に私は妃を説得した。相手の男はデリルが選び、何度かこの谷にやって来た。私はそれを断腸の思いで見ているしかなかったのだ。」

それから数ヶ月が経った。妃に懐妊の兆候が現れると間もなくその男は姿を見せなくなった。そして生まれたのがジャスミンなのじゃ。」

王は淡々と話しを続けた。

「それでその相手の男というのは。」

「・・・現、清国皇帝、宣宗^{せんそう}。という話じゃ。・・・あの頃はまだ私より地位の定まらぬ男であつたが、今から8年前、皇帝の座に就いたと聞いた。妃から宣宗の事を聞いたことはなかったが、デリルの話によると、血気盛んな若者であつたが、近習の者達にはとても優しく、勿論妃に対しても物腰は柔らかであつたということだった。ジャスミンの名も清国の呼び名は茉莉花^{マリファ}という、それは美しい花から取ったものだ。あの子は宣宗と我が妃の良いところだけを受け継いでいると思う。どんな手段であれ、私に子が授かつたのだ。一生大事にしようとかこれまで慈しんできた。だが年月を追う毎にオピウムの産んだ子の消息を知りたくなつた。私にとつて唯一血の繋がった者だったから。できれば私の後継者に、と考えるようになったしまった。私はデリルに命じ、そなたの行方を捜した。苦勞の甲斐あつてイギリスに住んでいるということがわかつた。バーナードの所在はわかつていたから、彼を通じそなたがここに来たくなるように仕向けて貰つたのじゃ。ああ、勘違いされては困るが、だからと言ってジャスミンに対する態度が変わる、というものではない。」

い。あの子は私の娘だ。だが息子と娘で自ずと周囲の期待するものが異なる。娘はやはり女なのだ。そなたをこの数ヶ月見てきてその思いは強くなるばかりだった。・・・ケイン。あの子の素性は決して怪しいものではない。親子として名乗り合うことは決してないが、あの子は生まれながらの皇女なのだ。分つてくれるな？」

じつとケインの目を見つめる王の目から幾筋もの涙が流れていた。

「はい。」

同じようにケインの目からも涙が流れた。

「では1つ聞くが、今の話を聞いて、ジャスミンに対する気持ちに変わりはあるか？」

「・・・陛下。僕が真実を知りたいと言ったのはそんなことではありません。彼女に対する気持ちには些いさかも変わるものではありませんし、聞いたことによつてこの先ずつと彼女を守るのは自分しかない、と痛切に感じました。・・・陛下、改めてお願いいたします。僕を陛下の息子として、又、ジャスミンの夫としてこの谷に一員に加えて下さい。」

「おおおお！そうか！嬉しいぞ。ケイン。私は今までこんなに嬉しいと思つたことはない！そうじゃ！早速婚礼の支度じゃ！」

「待つて下さい！その前に僕はしなければならぬことがあります！」

ケインは再び居住まいを正した。

「兎追うものは三兎をも得る？」

「何じゃ。私の決定に水をさす様な事を申すな。まあ良い。申してみよ。」

「学校の事と父の事です。父は今も突然フイとどこかへ行つたまま帰らない、という生活を続けていますが、僕がここに住んでしまつたら父の帰るところが無くなってしまふのではないかと・・・」

「ケイン。そなたは子でありながらジエイムズの事をまだ判つておらぬようだの。あの男はそんなことで泣いてわめくような男ではない。何事もなかったような顔で今にもここに現れるような気がするぞ。しかしそなたがそれほど心配するならカシミールに命じて様子を調べさせよう。それと学校の事じゃが、そなたの希望はどうなのじゃ？」

「僕は一度戻つてちゃんと卒業したいと思っています。」

「あとどれ位残っている？」

「本当は今年の7月で卒業だったのですが、ここに来くる時に休学の手続きを取つてきましたのであと2ヶ月ほどです。」

「2ヶ月か。・・・分つた。2ヶ月待てばそなたはここに戻つてくるのじゃな？」

「はい。必ず。」

「その言葉きつと忘れるではないぞ。もし自信がないのであれば私の方でも手段がないわけではないからその手を使つても良いのだが。」

「

「どういう意味ですか。」

「簡単なことじゃ。免除してもらふのじゃ。」

「免除？」

「そうじゃ。私にはそれができる。」

「そんなことができるわけがありません。」

「出来るかどうかやってみなくては分るまい？」

「どんな事をするつもりかわかりませんが、この件に関しては陛下を煩わせたくありません。どうか一旦僕が帰国するのをお許し下さい。お願いいたします。」

「私に任せればそなたは一拳に今すぐ三つの宝を得ることができんじゃないがお。」

「3つの宝？」

「1つはジャスミン、2つは次期王、3つめは卒業じゃ。」

「陛下。何事も1つづつ解決しなければなりません。一度に宝が入ったのではありがたみがありません。僕は今のままでも充分なんですから。最高の宝が手に入ったんですからね。」

「最高？」

「ジャスミンです。彼女は世界一の宝です。ですからあとは僕が努力して手に入れます。どうか僕の帰国を許可して下さい。」

「そうか。そこまで考えておるのなら許可せねばなるまいの。・・・良からう、一旦帰国しなさい。じゃが必ず戻ってくると誓ってくれ。良いの？」

「はい。必ず。」

そう言うと2人は固く手を取り合った。

別れ

翌日。アーサーの亡骸が荼毘に付された。スージーはその後、事情を聞いたジャックに諭され漸く彼の死を静かに受け止める事が出来た。

葬儀はヒンズー教の儀式に則って行なわれたが、谷全体が1外国人の死を悲しんでいるように思えた。アーサーは敬虔なカトリック教徒であったが、それは本国に帰ってから、ということで宗教の壁を超えた厳かな式になった。それは一昼夜続いた。

滞りなく葬儀が終わると、ジャックはケインと王に谷を去る旨を告げた。勿論スージーも一緒だ。ケインがその理由を尋ねると、アーサーの死をイギリスで帰りを待っている家族に伝える義務と、発見したばかりの石窟寺院群（ジャックは独自に発掘作業をし、あの洞穴の奥にはまだ数個の建造物があることを突き止めていた。）の調査をするために新たな調査団を結成して舞い戻ってくるためだと答えた。

出発の日について尋ねると、すぐにでも。と彼の決意は固い。

「ケイン。君はどうする？俺達と帰るのか？」

「僕も一緒に。と言いたところだけれど準備が追いつかないんだ。君達より少し遅れるけれど帰るよ。将来どうするにしても一旦帰って学校を卒業しなくてはね。でも急に帰るなんてどうして？」

「これは単なる思いつきじゃないんだ。ここに着いて調査を始めた頃から教授と話していたことなんだ。人数が不足しているから折をみて大学にその旨を報告し、人数の増加を頼もうってね。教授の死と新たな発見がそのきっかけを作ってくれた。だから俺はなるべく早く帰る。」

「・・・そうか。・・・わかった。・・・じゃあ一旦お別れだな。」
ケインは名残惜しそうに手を出した。

「何だよ。今生の別れみたいに。」

確かに当時の別れは二度と会えないことも意味していた。それほどイギリスとインドは離れていたのだ。

「そうだな。すぐ会えるさ。」

「そうだよ。でもこの次会うときはこんな風に君と話せないかもしれないな。」

ジャックもケインの出した手をがっちり掴んだ。双方の目に涙が滲んでいる。

「そなた達を見ているとジェームズとの別れが昨日の事のように思える。私達がそうであるようにそなた達の友情も変わる事はないであろう。」

「・・・陛下。いろいろお世話になりました。いつになるかわかりませんが、必ずまた戻ってきます。」

「無事に航海を終える事を祈っている。」

スツと立ち上がるとジャックは身を翻して部屋を去った。一度も振り返ることなく。そしてスージーと共に荷物を整え、兵士達数名に伴われながら谷を去って行った。

その姿を自室の窓から見送ったケインは、（僕もすぐ帰るよ。）と決意を新たにした。だが、その決意もあることをきっかけに不可能になってしまった。

心ならずも・・・

ジャックを見送りさて今度は自分も、と準備をしようとしたケインのもとにカシミールが何事か伝えるために急ぎ足でやって来た。
「どうしたんだ？」

「はい。実は王の容態が思わしくないので。」

「え？ジャックを見送ったときは何でもなさそうだったけど。どうして？」

「はい。私もそれは存じておりましたので、プレーナムから聞かされたときは耳を疑いました。」

「一体どう良くないんだ？」

「侍医の話では右側の身体が動かない、ということなのです。痺れているような感覚だとも申しておりました。確かに右手足に力が入らないと王も仰っておりました。そう言った言葉もはつきりしないと言いましようか、何を言っているのか私には理解できませんでした。侍医の通訳で漸く判断できた、という有様です。・・・ケイン様、どうか王のもとにいらして下さい。ジャスミン様も不安がっております。」

カシミールの話す言葉も不安がありありと見て取れた。

「わかった。すぐ行く。」

ケインはカシミールと一緒に王の寝室に向かった。

「ケイン様。」

ケインの姿を見たジャスミンは目に涙を溜めていた。ケインはジャスミンに軽く頷くと王のベッドに近付いた。

「先生、如何ですか？」

「以前から兆候があつたのかもしれませんが、右側の運動能力が極端に衰えておられます。衰えているというより全く機能しておりません。加えて舌が回らず言葉がはつきりしません。こちらの言う事

は理解されておられますが、恐らくこのままの状態が続くと思われます。」

「と言うと？」

「はい。政事はもう出来ないとみなさなければならぬということですよ。」

「全く駄目か？」

「はい。恐らく。」

「何てことだ……」

呆然とするケインに侍医は更に付け加えた。

「このままいけば良し、そうでなければ明日をも分らぬお命、と申し上げます。私は気休めを申し上げるつもりはありません。昔からそうしてまいりましたし、王もそういう私の気質を好まれました。ですからあえて申し上げます。今の王にとって最良の治療はどんな小さな衝撃も与えない、ということです。」

「もし、もし僕がこの谷から出て行ったら？」

「とんでもありません！ そのようなことをしたら現実になってしまいます！ ケイン様、医師のわたくしからのお願いです。どうかこのままここにお留まり下さい。」

必死に懇願する侍医にケインは何も応える事が出来ず部屋を後にした。

自室に戻るとがっくりとソファに身体を投げ出した。

（王を見殺しにしてこのまま帰国していいのか……）

ケインの心は王への忠信と愛国心の2つが泳ぐようにユラユラしていた。

決意

王の具合が悪くなってケインの予定は総崩れになった。一度本国に帰国し、大学を卒業してからまた再びこの地を訪れようと考えていた。しかしこうなっただけからはジャスミン1人残していくわけにはいかなくなってしまったのだ。確かにカシミールがいれば少しの間政事まつりごとは何とかなるかもしれない。問題は王という存在だ。口に出してこそ言わないが、カシミールも不安を隠しきれない様子だ。ジャスミンに至っては全面的にケインに頼りきっている。あのプレナムでさえ些細なことでケインに伺いを立てているのだ。本当に困った。こんなとき相談する相手がいれば何とか解決策も見出せるのに・・・ケインの心はプレッシャーに押しつぶされそうになっていた。

何の進展もないまま1週間が過ぎた。谷の重臣たちは益々ケインに頼ってきていた。王が発表したこともあり既にケインへの重臣たちの信頼度は100%を超えていた。ケインの発する言葉はそのまま直後実行されていたしそれがことごとく的を得ていたからだ。

執務室でその日の陳情書に目を通していたケインにカシミールが用向きを伝えに来た。

「ケイン様。王が呼びでございます。」

「王が？ 良くなったのか！」

「いいえ、そうではありません。ただケイン様をお呼びしるご命令です。」

「わかった。すぐ行く。」

一縷の望みをかけたが無駄だとわかるとケインはため息をつきながら王の寝室に向かった。

「陛下。ご機嫌麗しく・・・。」

礼儀に則ってお辞儀をするケインをジャスミンが素早くベッド脇に呼び寄せた。王が何やら話したいらしい。震える手でケインの両腕を掴み耳元で殆ど聞こえない声で話す王。ジャスミンの通訳で何とか要約をつかむ事が出来た。つまりはこうだ。自分はもう役に立たないからケインに今すぐこの谷の王になって欲しい。そして民衆のための政治を行なって欲しい。重点はその2つだった。王の願いにあいまいな返事をしてケインは寝室をあとにした。すぐ返答できる問題ではなかったからだ。だが早急に答えを出さなければならぬ事は彼が一番良く知っていた。執務室に戻ったケインを待っていたものは大量に重なった陳情書だった。

それを見た彼の心は決まった。いや既に決まっていたものを再確認させられたのだった。

準備万端

2ヶ月が経った。芥子の谷では二十数年行なわれなかったお祭りの準備に人々が浮かれていた。特にその一切を任されたカシミールとプレーナムは、相変わらずキヤーキヤー言い合いながらその準備に追われていた。勿論上位に立っているのはプレーナムである。あれだけの活躍をしていながらもカシミールはまだプレーナムにその実力を認められていないようだ。

谷の人々全てが楽しみにしていたお祭りの中心にいる人物、即ちケインとジャスミンは周囲の慌しさとは全く無縁のように王に付きっ切りで政事や慣習まじうじについて学んでいた。だがそれもプレーナムによって度々中断された。お祭りとは言わずもがな、ケインとジャスミンの谷を上げての結婚式だった。

そこに至るまでのケインの心境は複雑だった。苦勞して習得し、卒業後は天文学者として名を馳せる、というのが夢だったのにそれが叶わないばかりか、こともあるうちに中途退学しなければならぬのだから。それでも彼は谷の人々から受ける期待と感謝の声を裏切る事はできなかった。それで留まることにしたのだ。その決意を告げると王ばかりか噂を聞きつけた谷の人々が宮殿に押しかけ、ケインに溢れんばかりの感謝を述べた。無論ジャスミンの喜びようは尋常なものではなかった。何度もケインに真偽を確かめ、真実だと認識するまで数日間かった。ケインの残留が明らかになるとすぐ式の準備が始まった。

「もう！お二人ともご自分達の事なんですから少しは考えて下さい！ちつとも本気にならないんだから！」

「悪いね、プレーナム。全部きみに押し付けた形になって。でもきみだからこそ僕達は安心していられるんだよ。これからも頼むよ。」

「ま、まあケイン様。私そんなつもりじゃ。ええ！任せて下さいまし！お二人の事はこのプレーナムが一生かけて面倒見させて貰います！」

上機嫌でプレーナムは侍女達を引き連れまた仕事にかかりに行った。
「そなた達も大変じゃの。あのプレーナムと一生付き合っていないかなければならないとは。あれではあの子は一生独り身を通しかねない。まあこの谷であの子を嫁に貰いたいなどという酔狂な男はいないと思うがの。」

王の病気はこの2ヶ月で随分改善され、たどたどしいが人を介さず会話が出来るまでになっていた。それでも今の言葉を発するには大変な労力を要した。

「お父様ったらそんな事仰って。プレーナムが聞いたら怒りますよ。」

「そうであつたの。今の話はここだけの話にしておくれ。あの子は母親そっくりじゃ。あの子の母もお前の母のために生涯を捧げてくれた。冗談はさておき嫁の貰い手を真剣に探してやらねば可哀想じゃな。」

「そうですわね。」
横を向いたジャスミンの目に涙が光った。プレーナムの身の振り方も心配だが父の回復が何より嬉しいのだ。

「陛下。その事ですが、もしかすると灯台下暗し。ということはありませんか？」

「どういう意味じゃ。」

「いえ。ただ何となくですが。そういう気がするのです。」

「そう・・・か。・・・オ！そうか、そうか、フムなるほどのお。」

「え？お父様。一体それは誰ですの？・・・ケイン様。わたくしにも教えて下さい。誰ですの？」

しかし男2人は互いに納得したように頷くと話はそれでおしまい、とても言うようにその件に関して口を閉ざしてしまった。それを汐

にケインはジャスミンを伴い王の部屋を辞去した。その後姿を見送った王の目にも涙が光っていた。

婚礼

瞬く間に1ヶ月が経ち、ケインとジャスミンの結婚式当日となった。ケインの決意を受け、カシミールがイギリスの大学に退学届けを提出した。これで否が応でも芥子の谷に骨を埋める決心が固まった。次期王としての公式発表を待つばかりとなった。それについてはカシミールの演出により結婚式の最中民衆に告げられることになった。詳細はケインにさえも極秘裏に進められていた。

朝早くからジャスミンは花嫁衣裳を着せられていたが、ケインは時間ギリギリまで公務の引継ぎを行っていた。

正午の鐘と共に式が始まった。この日ばかりはムファド王も不自由な身体を押して出席していた。型通りの司祭の言葉が終わった後、インド式と英国式双方取り入れたような豪華な式になった。

「それでは誓いのキスを。」

司祭の言葉にケインはジャスミンの目をじっと見つめた。この谷に来てからの事件が瞬時に思い出された。仲間の死、ジャスミンとの出会い、自分の出生の秘密、政権争い、アーサーとジュデーの死、そして何より親友ジャックとの別れ……。さまざまな想いを胸にゆっくりと自分の唇を花嫁の唇に近づけた。

「諸君！おめでとう！！」

その時大きな声が教会中に響き、誰かが入口から入ってきた。

「……父さん！！」

「ジェ・・イム・・ズ」

ケインと王が同時に叫んだ。

「やあケイン。しばらく！……皇子……いや、陛下。お久しぶりございます。お体を壊されたと村人に聞きましたが如何でございますか？」

「ジェイムズ。・・・君は・・・相変わらず、驚かせる奴だ。」
ガシッと抱きあう初老ともいえる2人の男の間には、数十年という時の流れを感じさせないものがあつた。

「父さん！今までどこに行つてたんだ！」

ケインはまた子供の立場から咎めるように言つた。ところが当のジェイムズは全く気にする風もなく、

「ケイン。久しぶりに親友に会つたんだ。野暮な話はしないでくれ。――― おお！君がジャスミンか。何という美しさだ！私の愛したオピウムに匹敵するくらいだ！ケイン、上手くやったな！ハハハハ！」

ケインの父、ジェイムズが突然^{ちんぷう}闖入してきた事で式は中断を余儀なくされた。その余波なのか、主役だったケインとジャスミンは教会の外に押し出されてしまうことになってしまった。彼らの姿を見た村人達が口々に祝福の言葉を投げかける。仕方なく2人も手を振つてそれに応えた。

後方から車椅子に乗せられ出て来た王がカシミールに何かを指示した。カシミールは人々に向かって静かにするよう手をかざした。すると民衆は一瞬にして静まり返つた。

「・・・この目出度い席で発表することがある。――― 私、アブド・ドノファン・ド・ムファドは今この瞬間、王の座を退く。新王にこのケイン・スタンフォードを指名する。ここにこの事を宣言する！」

「えっ！！陛下、それは！」

驚いたケインが抗議したが、彼の言葉は民衆の歓喜の声にかき消されてしまい、王とカシミールはしてやったりとばかりにケインにウインクして見せた。またしても止む無くケインは人々に向かって手を振らなければなくなつてしまった。単に王家の結婚式だったはずなのに、これによって戴冠式も兼ねてしまう事になった。

2 度目の夜

戴冠式を兼ねた結婚式は、昼夜を問わず7日間続いた。その間主役の2人は仮眠程度しか取る事が出来ず、2人きりになるどころかゆっくり話をするすら出来なかった。結局周囲が彼等を解放し、やっと落ち着くことができたのは10日目の夜だった。

ジャスミンのたつての希望で新居となったのは、今まで彼女が使っていた部屋に少し手を加えたものだった。また以前あったケインのベッドは取り除かれ、大人3人が横になってもまだ余裕がある大きなものに変わっていた。勿論ジャスミンのも跡形もなく消えていたことは言うまでもない。

「フリーー疲れたあ。結婚式がこんなに大変なものだったとは知らなかったよ。ちよつと甘く見ていたなあ。」
巨大なベッドに仰向けに倒れこみ、ため息交じりにケインがこぼした。

「ごめんなさい。でも谷のみんながあなたを慕っているということ
がこれではつきりいたしましたわね。」

ベッドの側にあつた椅子に腰掛けながらジャスミンがすまなそうに答えた。清国から取り寄せたシルクで作ったドレスがとても清楚で美しい。ふとケインの脳裏にある考えがひらめいた。もしかしたらこのドレスは現清国皇帝が、名乗り合えない娘のために内緒であつたえしたものではないのだろうか？・・・あるわけないか・・・皇帝は生まれたのが男か女かさえも知らないのだから。むしろ無事この世に生を受けたかどうかもしれないのだ。いいや、今は他の事を考えまい。目の前の花嫁だけを見つめるだけでよいのだ。

ケインはゆっくりと立ち上がると、恥らうジャスミンの手を取りベッドに横たわらせた。

「君は僕のものだ。」

「あなたはわたくしのもの。」

ケインの情熱の炎は再びジャスミンに火をつけた。それが発端となつて2度目の夜が過ぎていった。

それから・・・

翌朝。引退したとはいえまだ大きな影響力を持っているムファド前王に2人は結婚の報告をしに行った。そこには何故かジェイムズの姿もあった。

「父さん！何故ここに？」

「ケイン様。お父上は前王の希望を聞き入れて下さいました。」

ムファド前王に代わり、カシミールが代弁した。

「希望？父さん、また何かやったんだろう！」

「ケイン。私がおかやろうとするとうしてお前はそうなんだ？少しは私を信用してもらいたいものだな。」

「信用？これまでの父さんのしてきたことを思い出してみて欲しいな。一体なにをもつてして信用なんて言葉を口に出来るんだ？」

「マアマアお二人ともこのへんでおやめ下さい。ケイン様、実はジェイムズ様は余生をこの谷にお暮らしになられるそうでございます。それが前王の希望でございます。古き友人として前王をお慰めしながらこの地で最後を迎えたいとのことでございます。」

「この谷で暮らす？本気か？」

「そうとも！私も孫の顔が見たいからね。それにオピウムの墓を守つて余生を過ごしたくなつたんだ。・・・ジャスミン、私がここにいたら迷惑かい？」

「いいえ。お義父様。わたくしもそうしていただきたいと思つておりました。」

嬉しそうに答えるジャスミン。昨夜の顔とは打って変わったしとやかな物言いに驚きながらも、ケインは幸せを感じていた。だがこの父が一緒では・・・相反する気持ちでしぶしぶ承諾した。

その日から新王ケインの政治が始まった。前王の業績をそのまま継承し、尚新しい産業を開発する。彼は文化面で得意分野の天文

学に力を入れることとし、また生産面では芥子の花の栽培を縮小し、気候に合った綿花の栽培を推奨した。それは以外にも旅から旅の生活を続けていたジェイムズの発案だった。それはのちに英国が興した東インド会社設立の先駆けとなるものであった。

その後

それから5年の月日が流れた。ケインとジャスミンの間には4歳の男の子と2才の女の子が生まれ、翌年また第3子が産まれようとしていた。彼の血を受け継ぐかのような印章が生まれながらにして長男の額にはつきりと認められた時、ケインはその伝説の意味を実感した。

”汝、2つの月が出づる時、全ての民は救われる”・・・

ケインの治世は村人達に受け入れられ、以前にも増して平和になっていた。前王ムファドが崩御したことは残念であつたが、その分、何故かジエイムズが張り切っていた。

話が前後するが、ムファド王が気にかけていたプレーナムの嫁入りはケインの思惑通り、カシミールが最有力視されていた。しかし当のカシミールは侍女のミンミンとさっさと結婚してしまい、彼女はあぶれてしまった。カシミールとプレーナムが大本命という計画を立てていたケイン達の話に、プレーナムは大激怒した。

「誰がこんな役立たずと結婚するもんですか！ケイン様、私を馬鹿にするのもいい加減にして下さい！」

プレーナムがそう言えば、カシミールも

「わ・私はプレーナムさんとけ・結婚するつもりはありません。そんなことをしたら私は一生頭が上がない男になってしまいます。お願いです、ジャスミン様！それだけは勘弁して下さい！」

泣きながらジャスミンに懇願した。これで彼女の嫁入りも暗礁に乗り上げた、と目されたのだが、ある人の出現で案外あっさり片がついた。

再会

一旦イギリス本国へ戻ったジャック達は、アーサーの弔いを済ませると、再び発掘に取り掛かるべく人数を募った。人数はすぐに集まったものの資金がなかなか集まらず、ジャックが船上の人になったのは帰国してから既に3年の月日が経っていた。

芥子の谷に足を踏み入れるとジャックの脳裏にはケインと別れた日の事がくつきりと蘇った。目の前に広がるジャングルはあの日と全く変わらずジャックを迎えてくれた。知らずに涙がこぼれていた。

二度と会えないと思っていたケインは、ジャックの再来に喜び、村を上げて歓待した。ただスージーだけは考古学への興味がなくなつたとみえて一緒に来るとは言わなかったようだ。

ジャック達が来てから1週間後。突然ケインとジャスミンはジャックから思いもよらないことを聞かされた。なんとプレナムと結婚したいというのだ。既にプレナムも了承済みだという。その時になって初めてケイン達はプレナムがカシミールとの話に乗ってこなかった理由^{わけ}を知った。きっかけはあの誘拐事件の救出劇らしい。気を失っていたプレナムを必死に介抱し続けたジャックに、鉄の意思を持っていたプレナムの心に思わぬ恋心が芽生えたのだ。ジャックも石窟寺院発掘に生涯を捧げるべくこの地に骨を埋める覚悟をしてきていた。

慌しく結婚式が執り行われ、彼もまたケインと同様芥子の谷の住人となった。

（これでいい。安泰だ。）

ケインとジャスミンはそれぞれの想いを胸に、これからのちも2人で力を合わせ谷を守っていこうと誓い合った。

最終話

ケイン達が幸福の絶頂にいる頃。インドを取り巻くアジア情勢は最悪のものになっていた。

清国皇帝、宣宗が発令したアヘン輸入禁止策は、イギリスとの間に二年にも及ぶ戦争を引き起こした。いわゆるアヘン戦争である。イギリス軍の総指揮官エリオットは廣東港くわんどうくわうを起点に次々と清国軍を打破し、総指揮官、林則徐りんそくじょを追い込んだ。更に、戦に破れた皇帝から植民地としていくつかの領土を差し出させた。そのエリオットの指揮の下、獅子奮迅の活躍をしたのが副官のテルミドルという男だった。

彼は人々からテリーという愛称で呼ばれイギリス軍からは尊敬されていたが、反面、清国軍からは鬼のように恐れられていた。ある時突然頭角を現し、副官にまで上り詰めた彼は前身を一切公表しない摩訶不思議な人物であった。それにも関わらずその統率力と戦術は素晴らしかった。彼はまた1人のインド人の部下を常に側においていた。2人は細かい作戦を練り、清国軍に壊滅的な打撃を与えた。それ以降皇帝は何故か戦意を喪失し、イギリス軍に領土を取られ続けていった。

その人物こそ、芥子の谷から忽然と姿を消したリユー・テリーと前芥子の谷の大臣、ヤコブの姿であることは誰も知らない。しかしそれが明らかになったところで今のテリー、いやテルミドル達にとって何の損害があるう。それを知っているのは読者のあなたと作者の私だけなのであるから・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8375c/>

芥子の花咲く

2010年10月9日21時35分発行